ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅸ－1

1981
滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅸ－１

１９８１

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
Sh27

序

県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに９年目を迎え、種々の資料や成果が蓄積されているところです。

ところで、ほ場整備事業区域も年々増加の一途をたどり、それらの工事と併行して発掘調査が円滑に実施できるよう鋭意努力しておりますが、そうした中で得られた成果を公開し、地元へ還元していく作業もまた重要な責務と考えます。

この報告書は湖北地方において昭和56年度に実施した調査結果をまとめたものでありますが、近江の歴史研究の一助になれば幸いです。

最後に調査にあたり御助力を頂いた関係者ならびに関係諸機関の方々に感謝の意を表します。

昭和57年３月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課
課長 外　池　忠　雄

例　　言

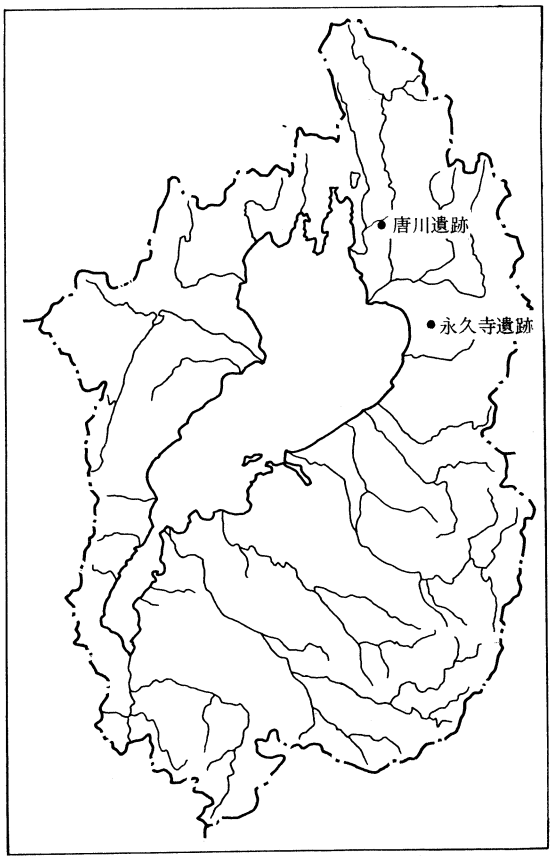
1.　本報告書は、湖北地方における昭和56年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。

2.　調査は滋賀県耕地建設課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。

3.　本書には伊香郡高月町唐川遺跡及び長浜市永久寺遺跡の２遺跡を収載した。

4.　現地調査や整理作業等に御協力を頂いた調査員・調査補助員等の関係者は各本文中に記載した。

5.　調査・整理及び報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘(永久寺遺跡)・用田政晴(唐川遺跡)が担当した。



本報告所収遺跡位置図

目　　次

I　伊香郡高月町唐川遺跡

1．はじめに …… 1
2．遺跡の位置と環境 …… 1
3．調査の方法と経過 …… 1
4．調査の概要 …… 5
5．おわりに …… 32
（図　版）

II　長浜市永久寺遺跡

1．はじめに …… 35
2．位置と環境 …… 35
3．調査の経過 …… 35
4．調査の結果 …… 38
5．出土遺物 …… 40
6．ま と め …… 44
7．おわりに …… 45
（図　版）

図　版　目　次

I　唐川遺跡

図版一　遺跡全景(北から)・Ⅰ区Ｔ５(北から)

図版二　Ⅰ区Ｔ５(南から)・Ⅰ区Ｔ10(北から)

図版三　Ⅱ区Ｔ６・７遺物包含状況・Ⅲ区Ｔ３(北から)

図版四　Ⅵ区墳丘全景・Ⅵ区墳丘トレンチ調査

図版五　Ⅵ区墳丘断面(北から)・Ⅵ区遺構検出状況(南から)

図版六　Ⅵ区Ｈ３遺物出土状況

図版七　Ⅵ区Ｈ３近景・Ⅵ区Ｈ３完掘後(南から)

図版八　Ⅵ区Ｈ１・Ⅵ区Ｈ１西壁付近

図版九　Ⅵ区Ｈ１北西隅付近・Ⅵ区Ｈ１

図版〇　Ⅵ区Ｂ１・Ⅵ区Ｂ２・Ｂ３

図版一　Ⅵ区全景・Ⅵ区Ｈ１遺物出土状況

図版三　Ⅰ区Ｔ５出土遺物(1)・Ⅰ区Ｔ５出土遺物(2)

図版三　Ⅱ区Ｔ６・Ｔ７・Ⅲ区Ｔ４Ｄ１出土遺物

図版四　Ⅵ区Ｈ１・Ⅵ区Ｈ３出土遺物

II　永久寺遺跡

図版一　上　遺跡遠景(東より)

　　下　遺跡遠景(北より)

図版二　上　Tr20全景(東より)

　　下　Tr20溝状遺構全景(北より)

図版三　上　Tr20溝状遺構東岸部分遺物出土状況(北より)

　　下　Tr20溝状遺構東岸部分遺物出土状況近景(東より)

図版四　上　Tr20溝状遺構東岸部分土器出土状況(東より)

　　下　Tr20溝状遺構東岸部分木製品等出土状況(北より)

図版五　上　Tr20溝状遺構中央部遺物出土状況(北西より)

　　下　Tr20溝状遺構中央部木製品出土状況(北西より)

図版六　Tr20溝状遺構出土土器

図版七　Tr20溝状遺構出土木製品・木の実

挿　図　目　次

Ⅰ　唐川遺跡

第１図　周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　唐川遺跡トレンチ配置図 …… 3
第３図　Ⅰ区Ｔ４遺構図 …… 5
第４図　Ⅰ区Ｔ４包含層出土遺物 …… 5
第５図　Ⅰ区Ｔ５・Ｔ６遺構図 …… 6
第６図　Ⅰ区Ｔ５出土遺物 …… 7
第７図　Ⅰ区Ｔ５・Ｔ10出土遺物 …… 8
第８図　Ⅰ区Ｔ10遺構図 …… 9
第９図　Ⅱ区Ｔ６・Ｔ７包含層出土遺物(1) …… 10
第10図　Ⅱ区Ｔ６・Ｔ７包含層出土遺物(2) …… 11
第11図　Ⅱ区Ｔ６・Ｔ７包含層出土遺物(3) …… 12
第12図　Ⅲ区Ｔ３遺構図 …… 13
第13図　Ⅲ区Ｔ４遺構図 …… 14
第14図　Ⅲ区Ｔ３・Ｔ４出土遺物 …… 15
第15図　Ⅲ区Ｔ４・Ｔ５・Ｔ９出土遺物 …… 16
第16図　Ⅳ区Ｔ４遺構図 …… 18
第17図　Ⅳ区Ｔ４出土遺物 …… 18
第18図　Ⅵ区墳丘測量図・横断面図 …… 19
第19図　Ⅵ区墳丘盛土出土遺物(1) …… 20
第20図　Ⅵ区墳丘盛土出土遺物(2) …… 21
第21図　Ⅵ区遺構配置図 …… 22
第22図　Ⅵ区Ｈ１遺構図 …… 23
第23図　Ⅵ区１号竪穴住居(Ｈ１)出土遺物 …… 24
第24図　Ⅵ区Ｈ２遺構図 …… 25
第25図　Ⅵ区Ｈ３遺構図 …… 26
第26図　Ⅵ区３号竪穴住居(Ｈ３)出土遺物 …… 29
第27図　Ⅵ区遺構面出土遺物 …… 29
第28図　Ⅵ区Ｂ１遺構図 …… 30
第29図　Ⅵ区Ｂ２・Ｂ３遺構図 …… 31

Ⅱ　永久寺遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 36
第２図　永久寺遺跡付近地形図及びグリット配置図 …… 37

第３図　Tr20溝状遺構実測図 …… 38
第４図　Tr20溝状遺構断面土層図 …… 38
第５図　Tr20溝状遺構出土土器実測図 …… 39
第６図　その他トレンチ出土土器実測図 …… 41
第７図　Tr20溝状遺構出土木製品実測図(1) …… 42
第８図　Tr20溝状遺構出土木製品実測図(2) …… 43

表　目　次

Ⅰ　唐川遺跡

第１表　各トレンチ出土弥生土器個体数 …… 17
第２表　Ⅵ区Ｈ１遺物観察表 …… 26
第３表　Ⅵ区Ｈ３遺物観察表 …… 28

Ⅰ　伊香郡高月町唐川遺跡

1　はじめに

本報告は高月北部地区唐川工区の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。

唐川遺跡は従来の滋賀県遺跡地図には記載されていなかったが、地元の今井清右衛門氏の御教示により唐川集落の南のかなり広い範囲に土師器・須恵器の分布が認められ、また塚状遺構も残存しているとのことで、遺跡の性格等を把握し、保存資料を得るために発掘調査を実施した。

今井氏によれば、土器類はこの地区一帯の耕土土質検査の際に散見されたとのことで、耕土直下から出土するが、ほとんど細片となって居り、再堆積あるいはかなり原位置から動いているのではないかと推定された。

事前の当時岡山大学大学院生であった乗岡実氏との地表観察によると、唐川集落の南端の畑には須恵器片および若干の灰釉陶器片が認められたが、そこより南の田面には遺物等が認められなかったので、現集落と遺跡はかなり重複していることが予想された。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算(4,297,000円)の再配当をうけ、財団法人 滋賀県文化財保護協会(理事長 和田純一)へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調 査 主 体　滋賀県教育委員会

調 査 機 関　㈶滋賀県文化財保護協会

調 査 指 導　滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師　用田政晴

調査補助員　田中東太・辻享(福井工大)・小竹森直子(岡山大)・荻野良博(滋賀大)・辻裕(滋賀大)・荻野勉(大阪工大)

なお、この調査にあたっては、高月町をはじめ地元唐川の方々にお世話になった。ここに記して謝意を表します。

2　遺跡の位置と環境

唐川遺跡は、伊香郡高月町大字唐川に所在する。高月町の北部平野中に標高200ｍを計る独立丘の湧出山がある。この湧出山南麓に現在の唐川集落があり、中ほどを余呉川支流の赤川が東西方向に流れる。遺跡は、この集落を含めた南の水田地帯の沖積地上に広がり、横山集落の近くまで含まれると考えられる。

微地形を見ると、現在の唐川・横山の両集落は、自然堤防上にあり、その間の水田はやや低地であるということと、遺物の散布状況からかつての集落があるとすれば、現集落と重複するのではないかと予想したのである。

唐川集落のすぐ北にある湧出山の尾根上には、前方後円墳を含む湧出山古墳群、その南斜面には、横穴式石室墳を中心とした唐川古墳群がある。また、横山集落の西には、２基の前方後円墳が遺存する。兵主神社古墳は現在では規模等は不明だが、横山神社古墳は全長38ｍを計り、おそらく横穴式石室を内部主体としてもつと考えられ、県指定史跡となっている(第１図)。

3　調査の方法と経過

1981年度の調査は、ほ場整備唐川工区のうち、北陸自動車道より西の部分の約32haを対象とした。発掘は排水路部分と切土計画部分について行うこととし、任意に試掘壙を設け、重機による表土(耕土等)除去後、遺構・遺物の検出に努め、その調査結果に基づき、必要と認めたところについて試掘壙を拡張した。

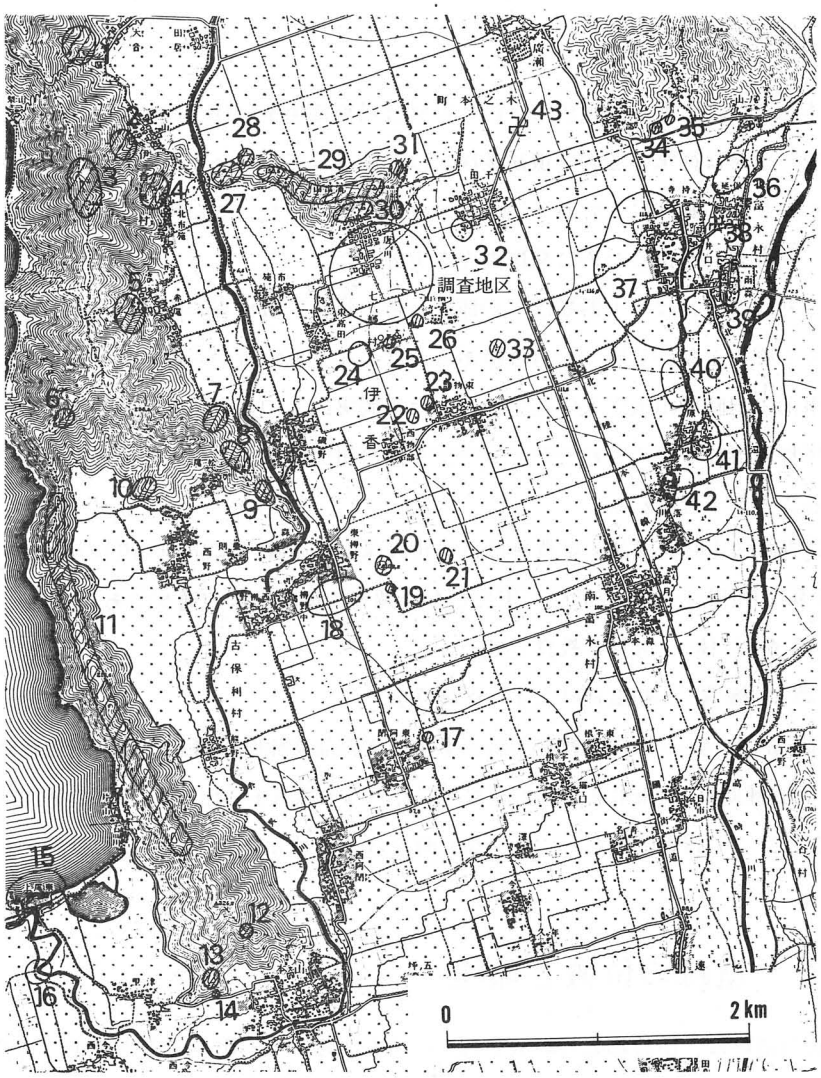
調査は、対象地域の北西端から始め、第２図のように、排水路部分に沿ってⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅴ区等と称し、Ⅳ区

については、排水路と切土が計画されていた北陸自動車道沿い西側の地区を含めた。また、横山寄りの水田中に平面方形の塚状の高まりがあり、古墳と思われたので、これを仮に唐川１号墳と称し、後にⅥ区と変更した。

この唐川地区周辺では、耕土の下に遺構面をもつ黄褐色が広がる。耕土の下に５～10cmの厚さをもつ間層を含む場合もあるが、基本的にこうした層序をなし、遺構・遺物を伴わない個所は主に灰褐色粘土層や茶褐色砂礫土層が耕土下に広がる。

唐川１号墳は、削平される計画であったため、現状保存を申し入れたが、この地方では、江戸時代の絞首台あるいは、死体焼却場があったといった言い伝えがあり、古墳であるとはとうてい考えられていなかった。従って今回は周辺部において、周濠等の確認調査を行い、古墳等の遺跡であることが明確になれば、改めて保存についての協議に入ることにした。

現地調査は稲刈り取り後の10月中ばから、開始したが、11月の「伊香しぐれ」と称する長雨、それに12月、２月の１ｍ近い積雪にたたられ、加えて重機等の都合で、調査は時おり途断え、３月20日に一応終了した。



1　大音古墳群
2　西山古墳群
3　西山山頂古墳群
4　小山古墳群
5　赤尾古墳群
6　西山古墳群
7　磯野古墳群
8　松尾古墳群
9　宮山古墳群
10　西野古墳群
11　古保利古墳群
12　山本山古墳
13　若宮山古墳（前方後円墳）
14　ゴンベ穴古墳
15　尾上浜遺跡
16　尾上遺跡
17　父塚古墳
18　柳野遺跡（土師器・須恵器敷布）
19　みち塚古墳
20　姫塚古墳（前方後円墳）
21　長塚古墳（前方後円墳？）
22　大将軍塚古墳（前方後円墳？）
23　生塚古墳
24　横山遺跡（弥生土器敷布）
25　横山神社古墳（前方後円墳）
26　兵主神社古墳（前方後円墳？）
27　唐川西古墳群
28　唐川北古墳群
29　涌出山古墳群（前方後円墳を含む）
30　唐川古墳群
31　涌出山古墳
32　石作遺跡
33　瓢塚古墳（前方後円墳？）
34　瓢簞塚古墳（前方後円墳）
35　饅頭塚古墳
36　大海道遺跡
37　井口遺跡
38　華寺遺跡
39　雨森遺跡
40　柏原北遺跡
41　柏原遺跡
42　渡岸寺遺跡
43　法光寺遺跡

第１図　周辺遺跡分布図

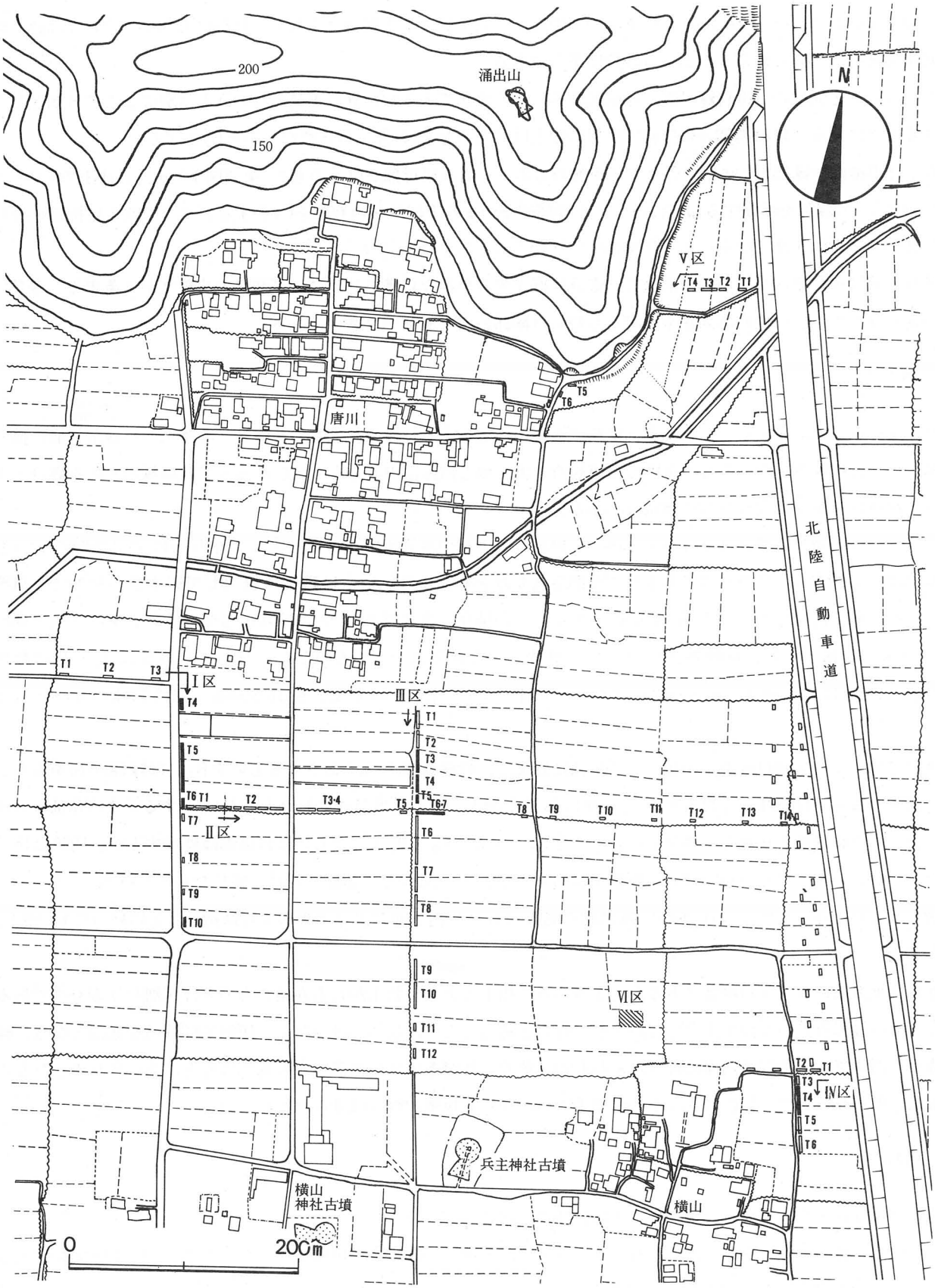
なお、記述の都合上、この報告で用いた弥生土器の形態分類について、ここで述べておく。

出土した土器はほとんど細片でしかも磨耗が激しく、完形品は数点であった。従って主に口縁部による形態分類にならざるを得なかった。また、同一の形態のものでも器形の大小により細分する必要もあると思われるが、細片のため経は推定の域を出ないため、明確なものは別にして特に注意を払わなかった。

〔壺〕

壺はＡ～Ｅに大別し、更に細分したため10類からなる。

壺Ａはいわゆる二重口縁の壺で頸部下端に貼付突帯をもつものである。A_1（第14図３）は口縁端部水平方向に平端に仕



第２図　唐川遺跡トレンチ配置図

上げられ、やや口縁内湾気味である。頸部は上開き気味であるが、内側はその上部を中心に更に粘土が貼られ厚手のものとなっている。A_2(第９図１)は頸部下端の突帯にハケ状工具による刺突文をもち、肩部にも頸部のそれとは逆の傾きの刺突文を持つ。１点のみの出土で口縁等は不明である。

壺Ｂも壺Ａと同様の二重口縁の壺の口縁部のみによる分類であるが、資料不足のためＡとは別にここでＢ類としてかかげることにする。口縁端部を斜方向で平担に仕上げたものをB_1、丸くおさめたものをB_2とする。

壺Ｃは単純に口縁部がくの字に外反する形態のもので、肩の屈折部が厚手のもの(第23図１)をC_1、薄手のもの(第９図10)をC_2、口縁部を拡張する傾向にあり、上端部ややつまみ上げ気味のものをC_3とする。また明瞭な屈折部を持たずに肩部から口縁にかけてゆるいカーブを描いて外反するものをC_4とする。

壺Ｄ・Ｅはそれぞれ１点のみの出土で、壺Ｄは直立する単純な口縁で外面にジグザグの沈線文が１条走る。壺Ｅはくの字に口縁が折れ、やや内湾気味を呈するもので口縁部の内外面共ヘラ磨きである。

〔甕〕

甕は受口状口縁に類するものを甕Ａ、単純にくの字に屈折する口縁をもつものを甕Ｂ、北陸系の口縁部外面に擬凹線を施したり、口縁帯をつくるものを甕Ｃ、伊勢湾・東海地方西部に中心をもって広がるＳ字状口縁のものを甕Ｄと大別し、それぞれを更に細別したため15類からなる。

受口状口縁に類する甕Ａは口縁端部上面が平担あるいはやや凹気味のもので、端部は外方向に突出気味のものをA_1同様に端部は外方向に突出気味であるが、端部を丸くおさめるものをA_2、口縁端は直立して終るものをA_3とし肩部外面に３条の櫛描沈線をもつもの(第14図10)がある。この場合、端部外面はやや凹気味となる場合が多い。A_3と同様に直立気味の口縁をもち、口縁外面にハケ状工具等による刺突文をもつものをA_4、同じく口縁部はA_3・A_4に類するが端部が明瞭に屈曲せず、ゆるいカーブをもって肩から胴に至るものをA_5、受部がゆるく内湾気味のものをA_6とする。

甕Ｂでは、くの字状口縁を呈するもので単純に外反し、口縁端部を丸くおさめるものをB_1、口縁端が面をもち、その下端をつまみ下げ気味にしたものをB_2、逆に端部上面をつまみ上げ気味にしたものをB_3とする。また頸部から斜方向に直っすぐ口縁部を形成し、外反しないものをB_4とする。B_5・B_6としたものは口縁部は外反するが、明瞭な頸部をもたず、ゆるいカーブを描いて肩から胴部に至るものであり、B_6はその端部に刻目を施したものをいう。

甕Ｃとした北陸系の甕は口縁外面に擬凹線を施したものをC_1、単にヨコナデあるいは指押さえに終ったものをC_2と分類する。

甕Ｄは東海系のＳ字状口縁甕であるが、１点のみの出土であり、胎土からも在地のものとは区別しうるものである。

壺・甕の底部片もいくつか出土しているが、脚台を備えたものは量的には少なく、圧倒的に単純な底部となる。脚台は薄手で内湾気味、端部は内面に折り込んだもの、薄手で外開き気味の体部をもち端部は外方に少し張り出したもの等、東海系と思われるものが目につき、小形・厚手のいわゆる在地産の脚台は見られなかった。

〔高坏〕

高坏はＡ・Ｂ・Ｃに大別し、Ａは更に２類に分けられる。

高坏Ａは口縁部が外反するもので、外反するカーブが大きく、端部は平担に成形したもので、 A_2は外反度がA_1より水平に近づいた形をとり、端部が丸くおさまるものをいう。

高坏Ｂは受部と口縁部との境がなく、全体にゆるく内湾する坏部をもつものをいう。

高坏Ｃは坏部が深く、いわゆる欠山式の高坏に類するものである。

〔器台〕

器台はＡ～Ｄに大別し、更に細別を試みた。

器台Ａは真っすぐな受部をもち、口縁に垂下する櫛描沈線を施した面をもつもので、棒状浮文を３個セットで４方向に備える。

器台Ｂはやや外反気味の受部をもち、端部を拡張し、端面に沈線を施すものをＢ１、同様のもので大形のものをＢ２、かなり厚手で端部は上下に拡幅気味のものをB_3とする。

器台Ｃは真っすぐな受部のまま終るもので、端部は斜方向の平担面に仕上げているものをC_1、 ややつまみ上げ気味のものをC_2 とする。また、ゆるやかに外反する受部をもつ小形のものをＤ類とした。

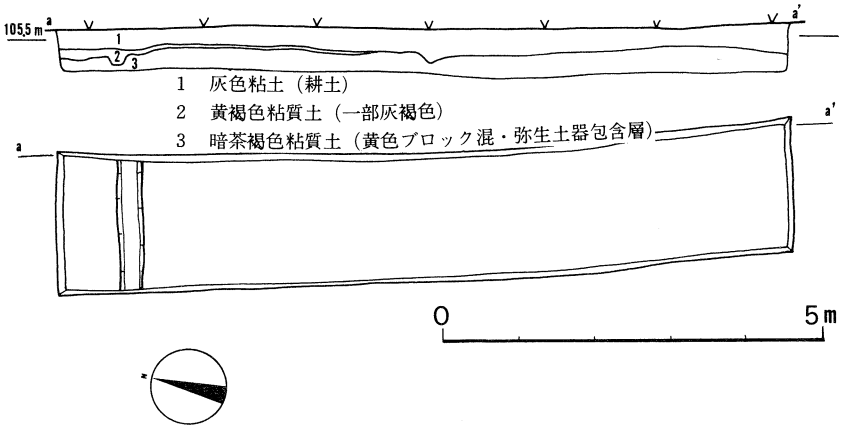
4　調査の概要――遺構と遺物

（１）Ｉ　区

Ｉ区と称したのは、計画区域・北西端から、東へ向い、農免道路からは、南へ向う排水路部分をいう。Ｔ１～Ｔ10の10ヵ所の試掘壙のうち、Ｔ４で弥生土器の包含層が認められ、Ｔ５では、瓦類・須恵器の散布が認められた。又、更に、溝状遺構も検出されたため南へ拡張した。またＴ10では、東西方向に走る溝２条がみつかったが、遺物は埋土から弥生土器が１片出土したのみであった。

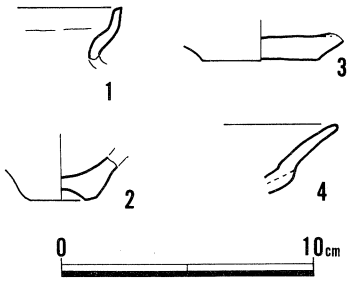
（Ｔ４）

Ｔ４は基本的に３層からなり、耕土が第１層、黄褐色粘質土の薄い堆積を第２層とし、弥生土器を含む暗茶褐色粘質土（黄色ブロックを含む）を第３層とした。遺物は細片で、量的にも少量であった。主にトレンチの北半に散在していた。トレンチ北端で東西に走る幅30cm・深さ５～10cmの溝が１条検出されたが少くとも古墳時代以降のものである（第３図）。

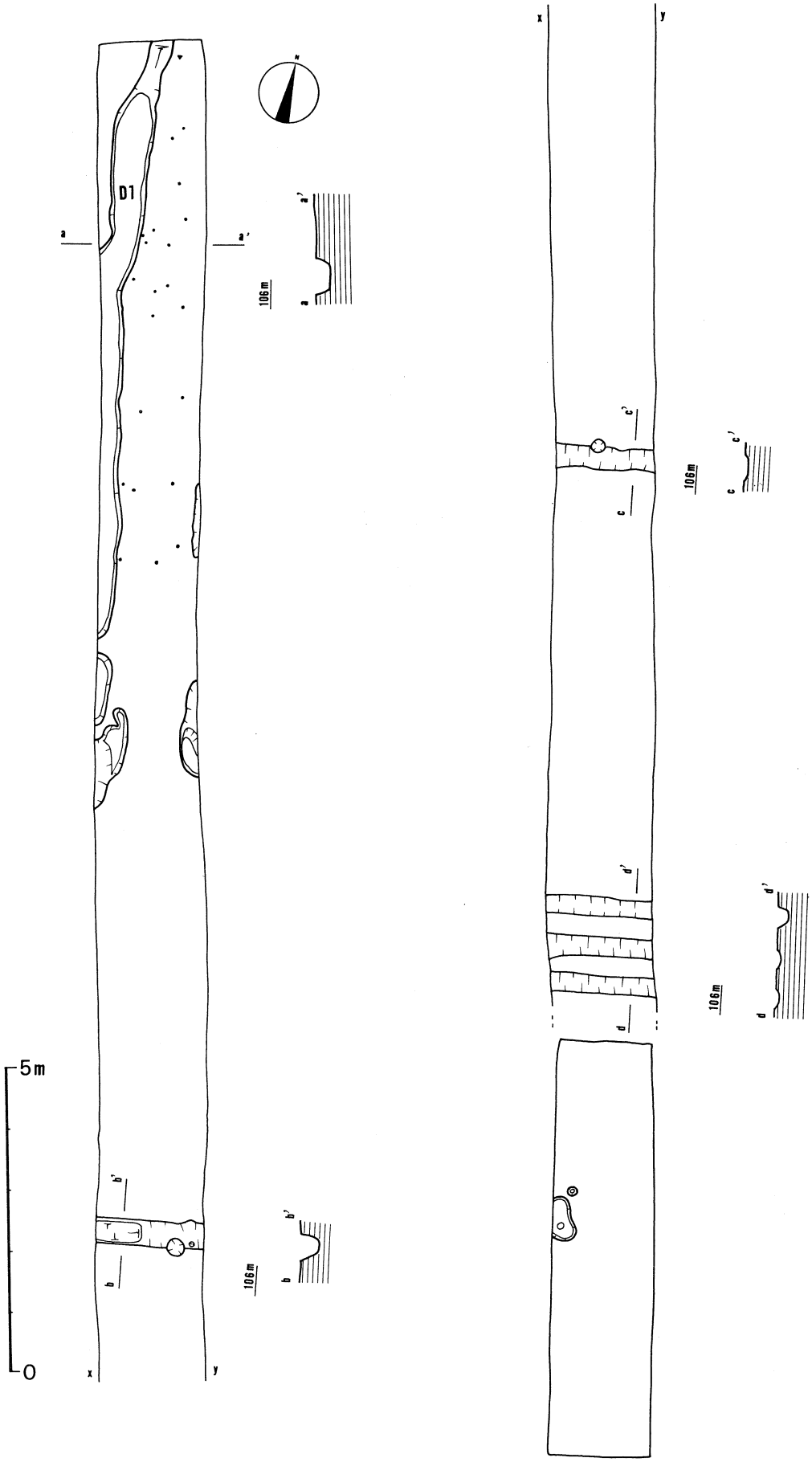


第３図　Ｉ区Ｔ４遺構図

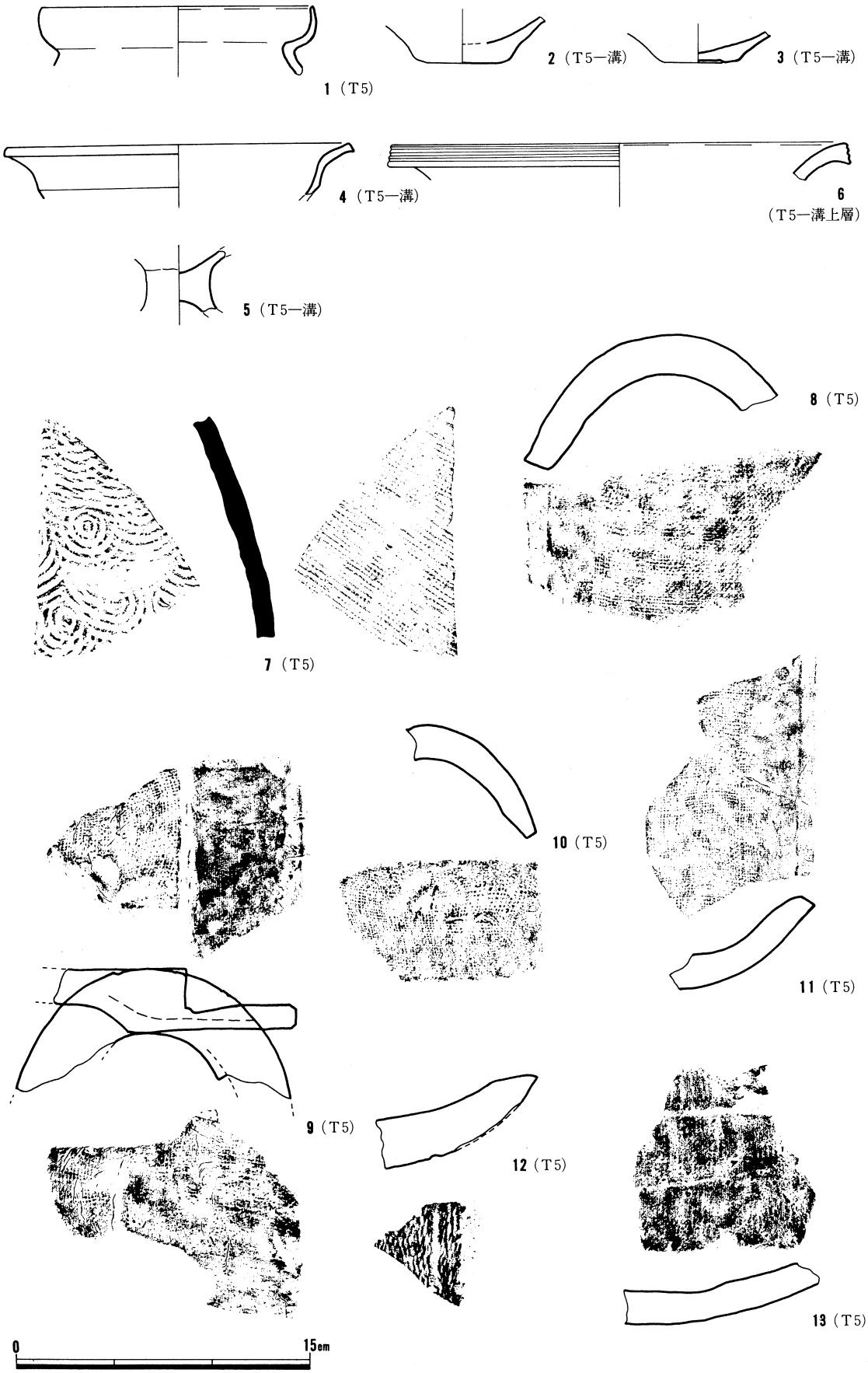
包含層中遺物として、甕４・高坏２・器台２個体、そして底部片２が出土しているが、いずれも小片で磨耗しているため、図示するに至ったのは４点のみである。(1)の甕の口縁受部外面には長楕円形の刺突文が斜方向に施されている。(4)は高坏の口縁部片である（第４図）。



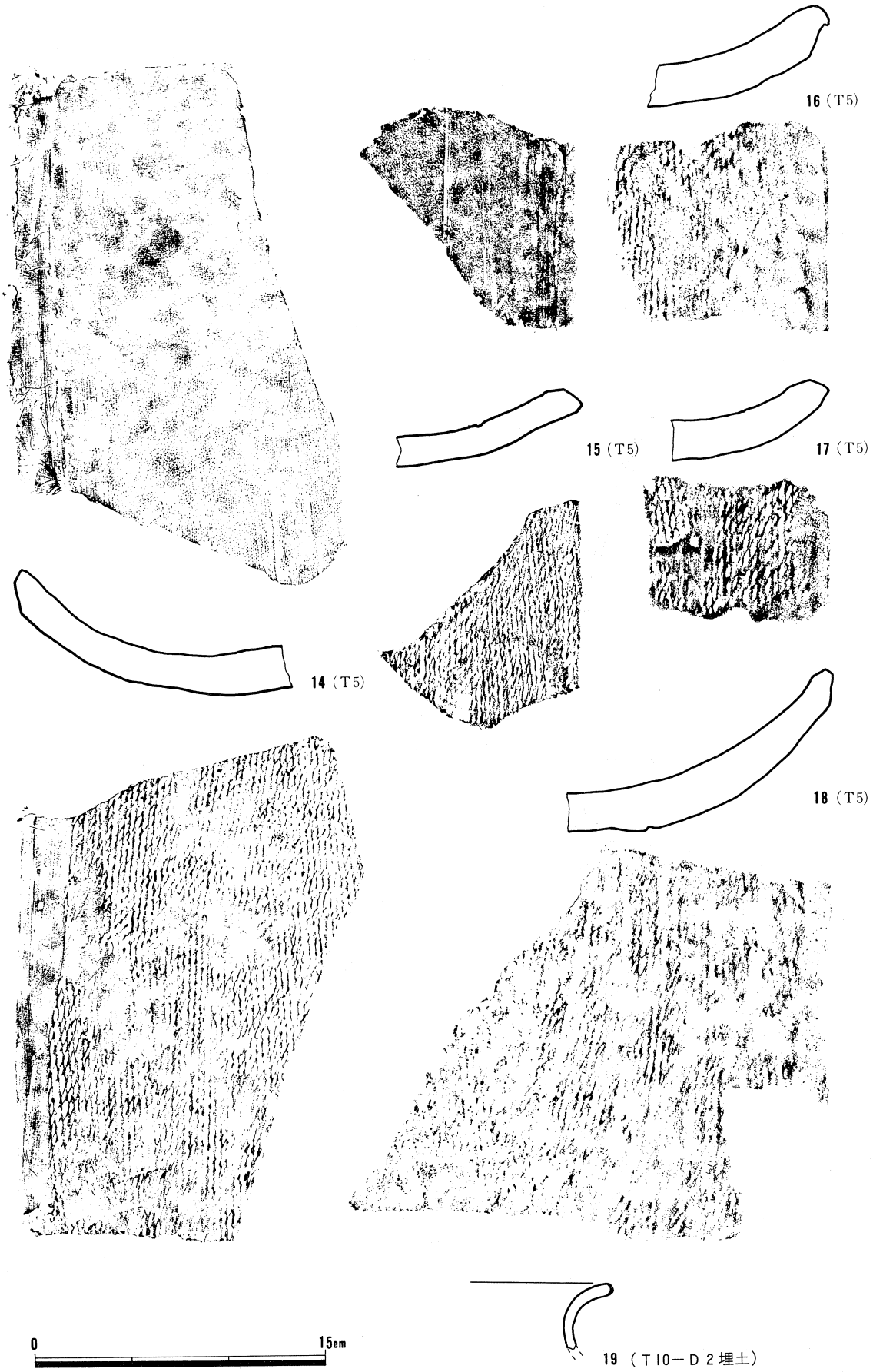
第４図　Ｉ区Ｔ４包含層出土遺物



第５図　Ｉ区Ｔ５、Ｔ６遺構図　（・は瓦片出土地点）



第6図　Ⅰ区T5出土遺物



第７図　Ⅰ区Ｔ５、Ｔ10出土遺物

（Ｔ５）

Ｔ５では、耕土を除去するとすぐその面で、溝状遺構・ピットが検出された。北半の溝は、ほぼ北から南へ向うもので、幅は広いところで、80cm程度で、深さもほぼ30cm程度である。それにつづくトレンチ両端のピット群（Ｐ１～Ｐ４）も、この溝の延長か同様のもので、埋土も暗茶褐色粘質土で、均一であり、いっきに埋まったような状況を呈する。その埋土中に弥生土器細片が含まれる。また遺構面からは須恵器・瓦類が出土している。

溝は人工的な形態をなさず、埋土も、Ｔ４で見られた包含層そのものであるため、包含層の自然流路・土壙への堆積と考えられる（第５図）。

また、この北半の溝付近では、瓦片が散在しているが、完品はなかった。また軒瓦も見られない。ここは、寺院跡等に伴う瓦溜まりといった状況とは、その様相が若干、異なるようである。

弥生土器は壺１・甕７・高坏１・器台１・底部片２・高坏筒部1 個体ずつ認められる（第６図・第７図）。(1)の甕は口縁がやや内湾気味のゆるい受口状を示す。甕底部(3)がややくぼんでいるのは輪積みの後、底を埋めたためである。器台(6)は口縁端部に櫛描沈線を施している。いずれも磨滅が著しく、調整は不明である。

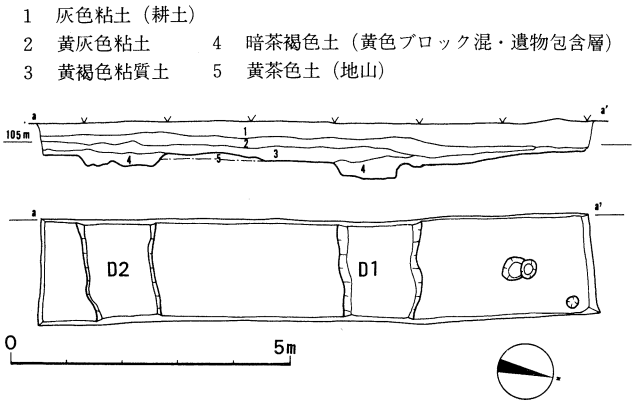
丸瓦は凸面ケズリ又はナデ、凹面やや荒い布目のもの(8)２点、凸面ケズリ又はナデ、凹面細い布目のもの２点以上、凸面ケズリ又はナデ、凹面細い布目をケズリ又はナデ消したもの１点、凸面に凹面より荒い布目がある玉縁をもち、凸面ケズリ、凹面布目のもの(9)１点、同類で玉縁部分のみ(10)２点、凸面ケズリ又はナデ、凹面タテハケ状痕跡をもつもの１点、凸凹面ともケズリのもの１点、計10点（個体）以上になる。平瓦は凸面縄目タタキ、凹面布目で須恵質の焼きを示すもの（14・15）３点、凸面やや荒い縄目タタキ、凹面布目で生焼けのもの(16)４点、凸面やや荒い縄目、凹面は布目をほぼ全面にわたりナデ又はケズリで消したもの（17・18）２点、凸面細かい縄目タタキ、凹面同上で黒色のもの(12)２点、凸面ケズリ、凹面荒い布目のもの(13)１点以上、凸面ケズリ、凹面細かい布目のもの(11)４点以上、凸面ケズリ、凹面ケズリ又はナデ４点以上、凸面不明、凹面布目のもの３点以上、計32点（個体）以上となる。

Ｔ５南半では、東西に走る溝５条が検出できたが、規模はＴ４の溝と同様で、それに伴う遺物はない。この付近の地形は東が上であるため水田耕作に伴う施設と考えてよいであろう。

（Ｔ10）

Ｔ10の東西方向に走る溝は幅は1.2～1.3ｍで、3.3ｍの間隔をおいて２条、認められる（第８図）。深さは、双方共26～30cmといったところで、平底状を呈す。寺院の寺域を示す築地に伴う溝に似るが、溝（Ｄ２）の埋土中からは、弥生土器片が１点出土したのみであった（第７図）。

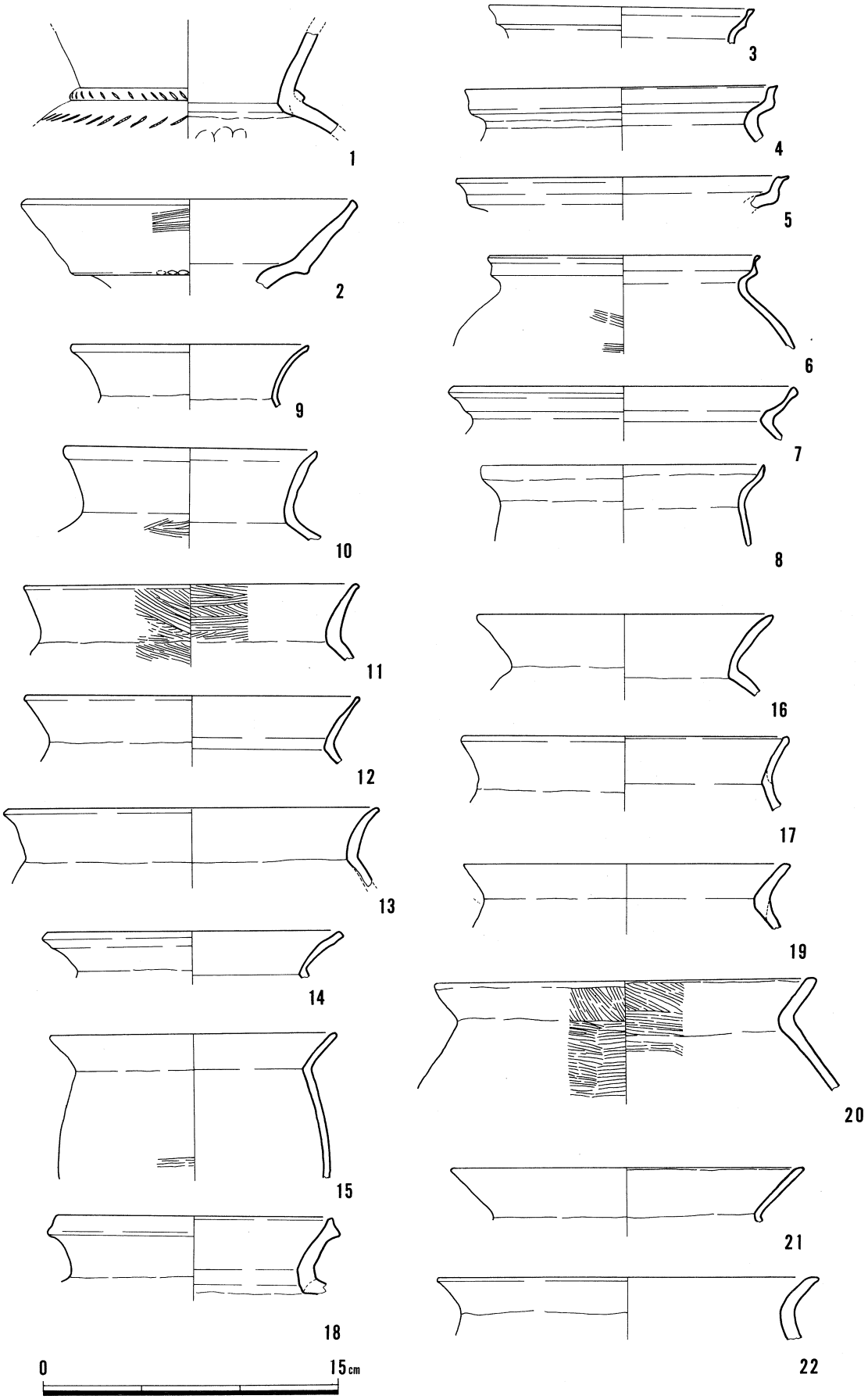
Ｔ10－Ｄ２埋土から出土した甕は、丸くおさめた口縁部端に刻目らしきものが認められるが明瞭ではない。１～２mm大の砂をかなり多量に含む荒い土で、Ｔ５出土の土器が２～３mm大の砂を含んでいる点とくらべると胎土は明らかに異なる。



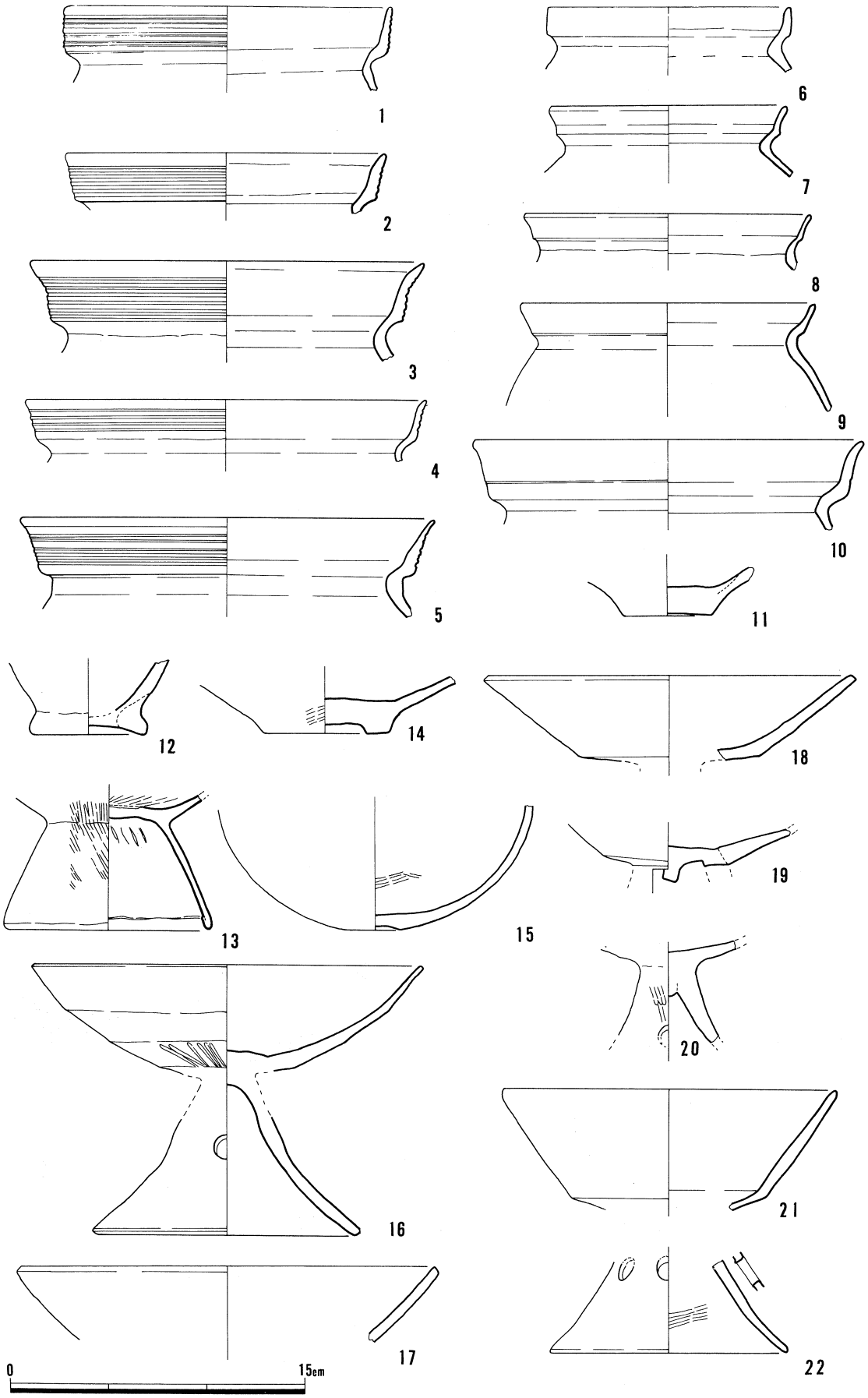
第８図　Ｉ区Ｔ10遺構図

（２）II　区

II区は、Ｉ区のＴ６－Ｔ７の間から東へ向かう排水路部分にあたり、Ｔ１～Ｔ14まで試掘壙をあけ、Ｔ３とＴ４、Ｔ６とＴ７を後にそれぞれつなぎ、Ｔ１・Ｔ２付近も予定路線はすべて調査した。



第９図　Ⅱ区Ｔ６、Ｔ７包含層出土遺物（１）



第10図　II区Ｔ６、Ｔ７包含層出土遺物（２）

Ｔ１からＴ７にかけては、須恵器・土師器・弥生土器等の散布が認められたが、遺構は検出されなかった。また、Ｔ３・Ｔ４では耕土直下の黄褐色土層から瓦片も若干出土したが、これらの遺物は細片であり、特にＴ６・Ｔ７では、耕土下層の灰茶褐色砂礫土層(赤燈色のブロック混)中に、弥生土器が折り重なっている部分が認められた。Ｔ８～Ｔ14までは、砂礫土層が耕土の下の主な土層となっており、遺物・遺構は皆無であった。

このＴ６・Ｔ７付近は、Ⅳ区とも関連するが、明らかに再堆積という状況であり、砂礫を含む土層中に、細片として在るということは、Ⅳ区のＴ４などの状況と酷似している。

(Ｔ３・Ｔ４)

Ⅱ区Ｔ３の条里に伴うと思われる溝からは高坏$A_2$１・器台$C_1$１点出土し、須恵器坏の高台部分が１点、９世紀前後の坏身および蓋もみられる。

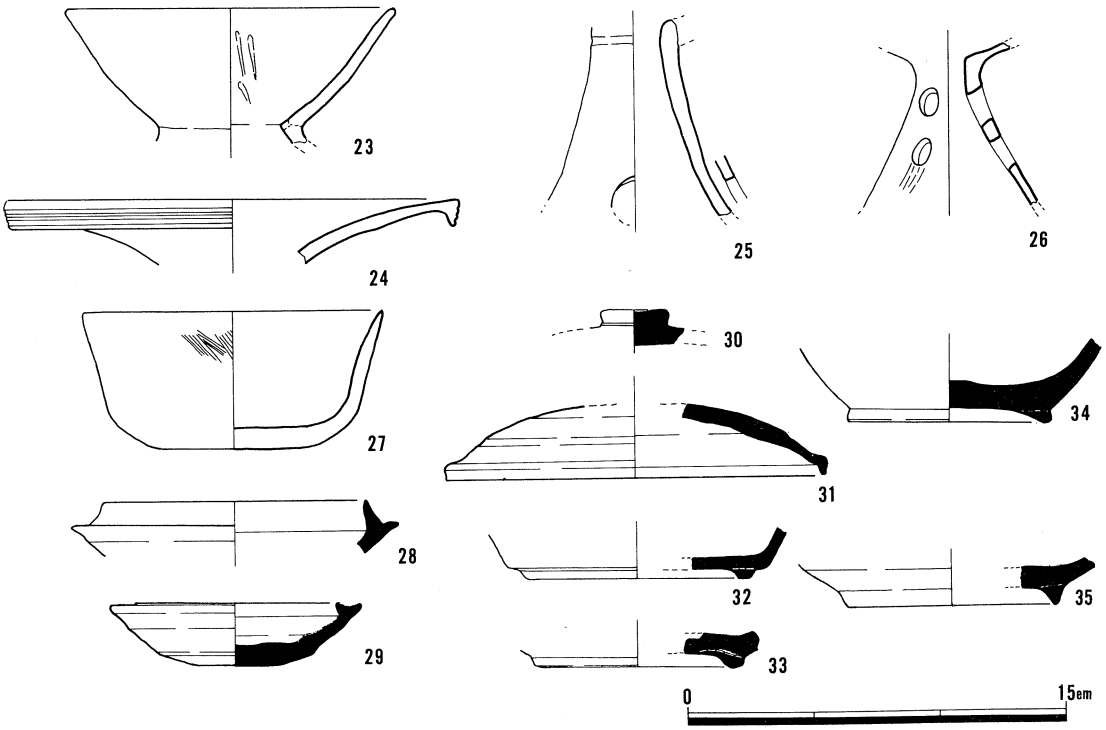
Ⅱ区Ｔ３・Ｔ４包含層からは、弥生土器・須恵器・平瓦が出土している。

弥生土器は甕７・高坏１個体分。須恵器は坏身高台部分が１、坏身１、坏蓋１、甕２個体分である。坏身は６世紀前葉、蓋は６世紀後葉のものである。

平瓦は凸面縄目タタキ、凹面布目のもの２点、凸面やや荒い縄目タタキ、凹面布目をほぼ全面にわたりナデ又はケズリで消したもの１点、凸面細かい縄目タタキ、凹面同前で黒色のもの１点の計４点だが、いずれも小さな破片である。

(Ｔ６・Ｔ７)

Ⅱ区のＴ６・Ｔ７包含層中からは器種の判別可能なもので140個体余りの弥生土器ないし古式土師器片が出土した(第９図・第10図・第11図)。内訳は壺15・高坏11・器台４・底部片４・高坏脚部片３・器台脚部片２の他、須恵器坏身11・坏身高台部６・坏蓋８・灰釉椀高台部２・灰釉椀口縁部４、山茶椀３となる。また土師器椀(27)もある。



第11図　Ⅱ区Ｔ６・Ｔ７包含層出土遺物(3)

壺(1)は頸部下端の貼付突帯と胴上部に刺突文を持つ。甕(3)～(5)は受口状口縁を呈し、口縁端を平担あるいはやや凹気味に仕上げる。甕(6)はいわゆるＳ字状口縁であり、器壁も薄く、胎土は灰褐色を呈し、他のものと明確に区別ができる。

甕Ｂ類(11)～(17)、(19)～(22)には(11)・(12)のように口縁内外～胴部を全てヨコハケで調整したものと、口縁内外共ヨコナデ、胴部外面ハケメ調整の２種があり、後者の割合が高い(第９図)。

第10図の(1)～(10)は北陸系の甕で(1)～(5)は口縁外面に擬凹線をもつ。２～３mm大の砂を多量に含む点と淡黄褐色系等の色調を呈する点等、在地のもの―特にＢ類と胎土で区別が可能である。(13)の脚台は器壁が薄く、つくりも良い。在地のものではないだろう。(16)・(17)はゆるやかな坏部をもつＢ類の高坏である。内外共ヘラミガキである。(16)は２方向にスカシをもつ。(19)・(20)は坏部が差し込みであることを示す。(22)のスカシは外方から穿孔したものであるが、何ヵ所かは不明。(23)は壺で内外共にヘラミガキ。この地区では壺類の中で最も多く在る類である。

器台(24)は沈線を施す。第11図の(28)～(33)は６世紀後葉～８世紀代に至る須恵器類、(34)・(35)は山茶椀であり高台部底にはモミ痕が認められる。

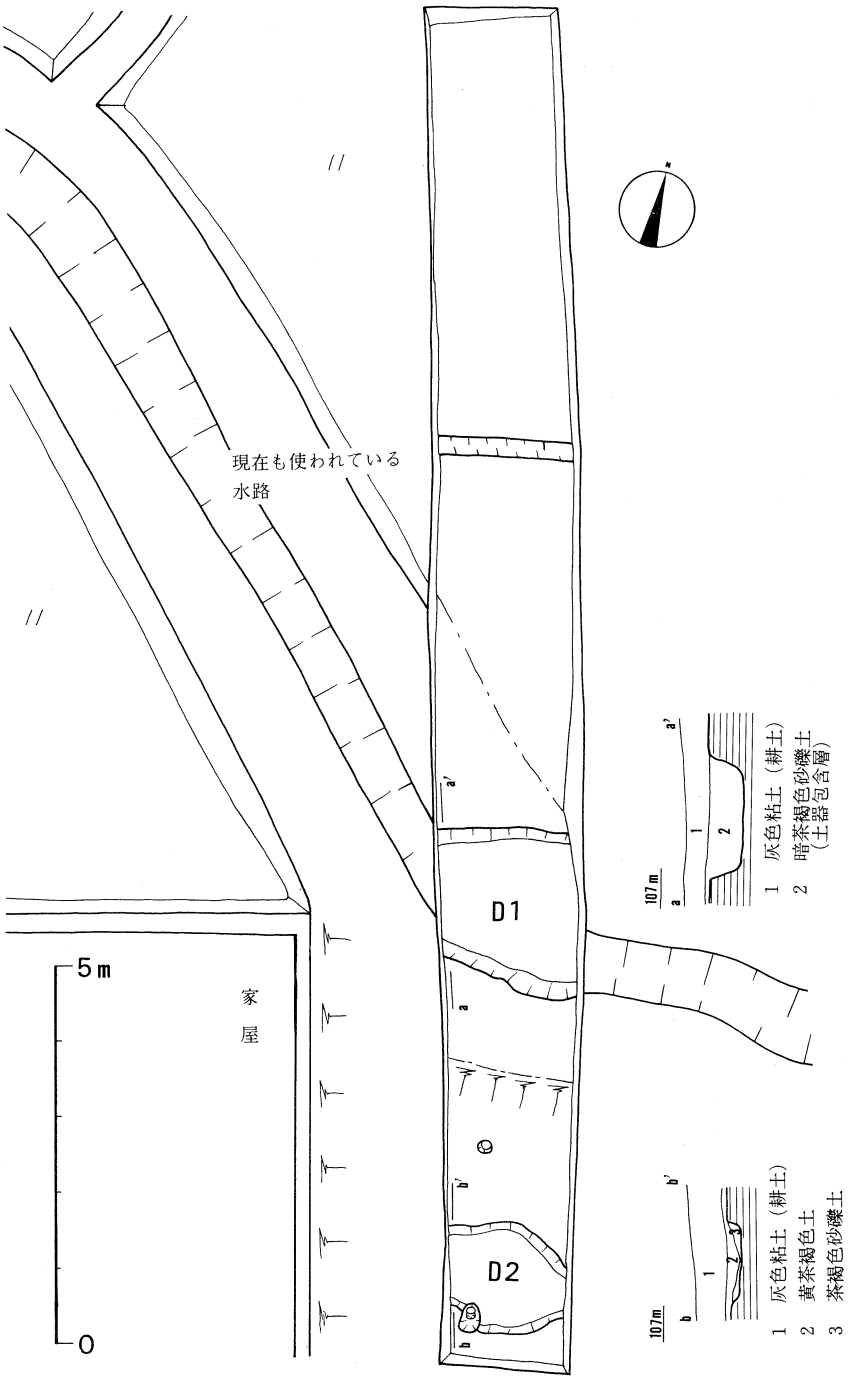
当トレンチの特徴は甕A_3・甕B_1が多く、特にＡ類においては受口口縁端が外方に突出したものが多い。又、北陸系の甕がある程度量的にまとまっている点、高坏が多いのも特徴である。

（３）Ⅲ　区

ほ場整備計画地域のほぼ中ほどを南北に計画されている排水路部分をⅢ区と称した。

Ｔ１～Ｔ８まで土師器・須恵器等の遺物を伴うため、ほぼ全線にわたり調査した。

Ｔ３ではトレンチの南半に２条の溝Ｄ１・Ｄ２が検出された(第12図)。Ｄ１は、現代の浅い溝と重複しており、現代の溝よりその規模は大きく、上幅は２ｍ前後を計り、深さも50cmの平底をなす。Ｄ２は浅く、平面形でみると土壙である可能性もあり、埋土に若干の黄茶褐色土を上層にもつ。またＴ４では第13図のように、主に東西方向に走る溝５条と、多数の土壙を検出したが、Ｄ３などは、底はボコボコしており、特に土壙は不定形で、これらの埋土はＰ１とＰ３を除き暗茶褐色砂礫土で、弥生後期～古墳時代初頭の土器の細片を含む。この土層は、Ｔ３での特



第12図　Ⅲ区Ｔ３遺構図

にＤ１の埋土と同一のものである。

これらの遺構の形態と、埋土の状況から、Ｉ区Ｔ５でみられたような、何らかの原因により自然流路や土壙がいっきに埋まったものと考えられる。

Ｔ５でも２個のピットが西側辺に沿って検出されたが、これもＴ３・Ｔ４と同様の埋土をもつ。

Ⅲ区Ｔ３－Ｄ１からは甕５・器台脚部１と須恵器高坏１個体出土。(1)は内径の方が広いスカシを４方向にもつ。(2)は３方向にスカシを穿ち、短脚一段になる可能性もある。

Ｄ２からは壺１(Ｃ４)、須恵器坏身１(８世紀後葉)の２点のみ出土。

Ⅲ区Ｔ４での遺構外では壺１・甕２・高坏３・甕底部１・器台３個体出土。器台(38)のくびれ部内面には薄い粘土の貼りつけ痕が認められる。須恵器は坏身高台部分(34)など３、坏身(31)など２、蓋(36)１点と灰釉椀１、青磁椀１(38)が出土する。

またＴ４－Ｄ１からは壺10・甕19・高坏２・器台２個体出土し、壺(3)は頸部下端に尖がった凸帯をもつ。頸部内面に指頭により粘土を貼り付け、肥厚させているため、頸部内面は円筒状をなす。壺(5)の口縁端には凹線文に似た調整がわずかに認められる。

Ｔ４－Ｄ２では６世紀初頭の須恵器の坏蓋が１点出土。

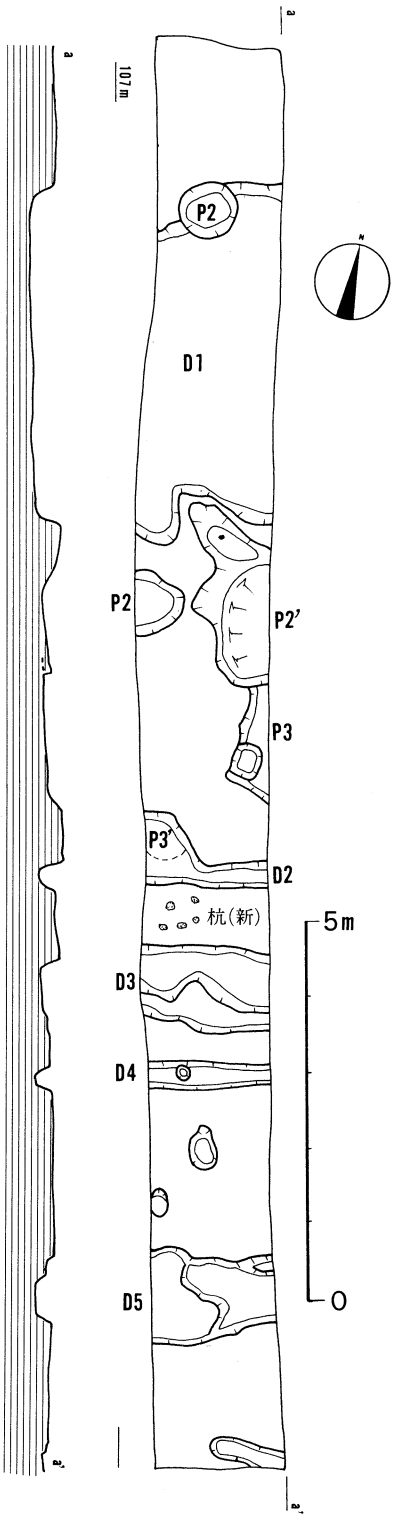
Ｔ４－Ｄ３では甕２点と砥石１点出土。甕(12)の口縁外面はやや凹気味で内外共ヨコナデ調整である。砥石は緑灰色の堆積岩系のものを石材とし、端部付近に筋砥石風の２条の溝をもち、中央にゆくにつれて表面は丸味を増す。相当使用されているようである。

Ｔ４－Ｄ５では壺３・甕４・器台１と須恵器坏身１点、灰釉椀高台部２点出土。壺(9)は厚めの直口縁外面にヨコナデ整形の後、１条のヘラ描沈線をジグザグに施す。内面には粘土継ぎ目が残存する。甕(19)の口縁外面は擬凹線をもち、胴部には、わずかにヨコハケが残る。

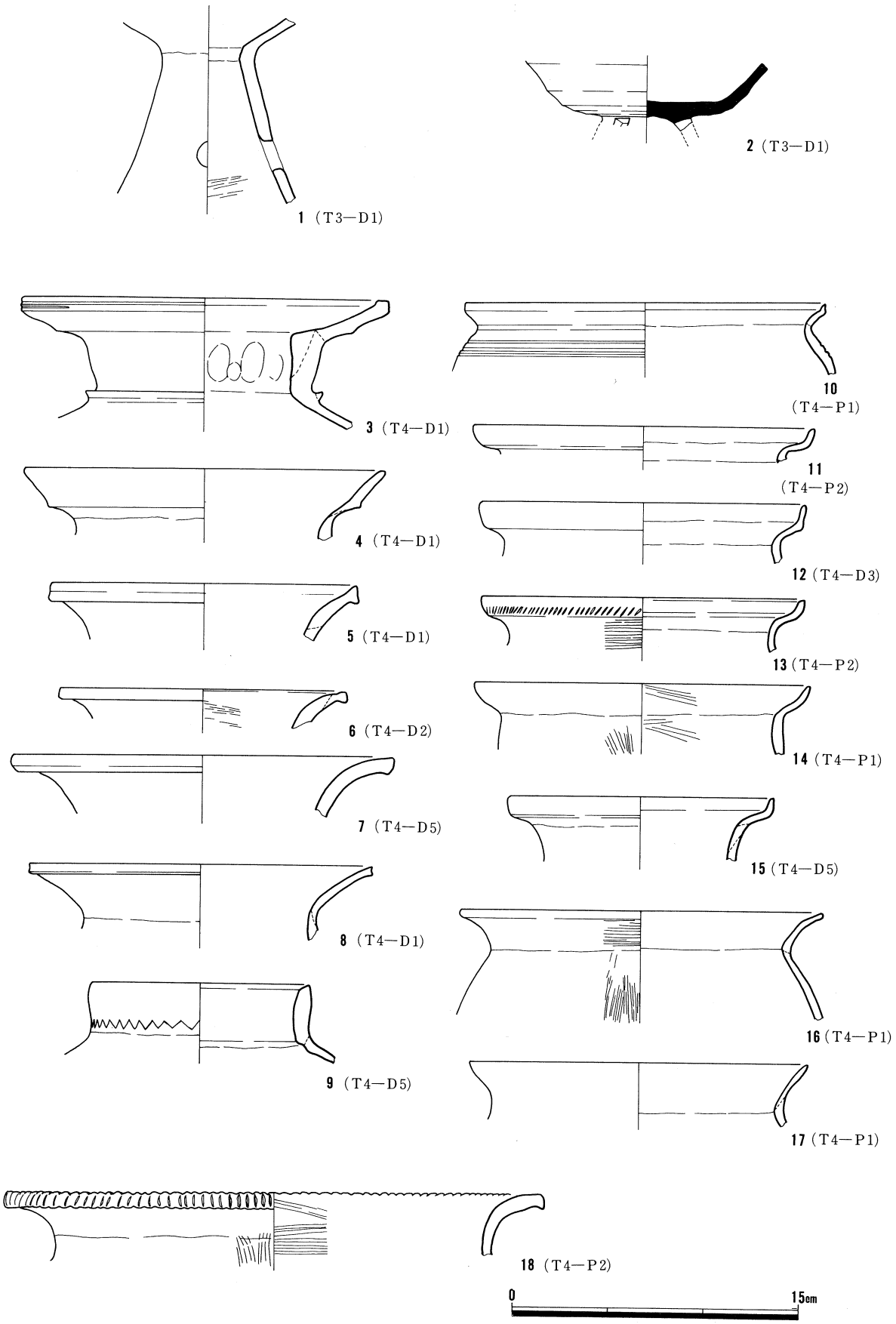
他にＰ３から出土した甕(10)は胴上部に３条の擬凹線をもち内面はヘラケズリと思われる。また甕(16)・(17)はやや器壁が薄く、器台(27)は上下に強く張り出した口縁外面に擬凹線を施し、その上に２本１単位の棒状浮文をおそらく６方向に貼付ける。棒状浮文には浅く刻目がつく。小形器台(28)は口縁端をヨコナデで丸くおさめ、それ以下を内外共ヘラミガキによって仕上げる。

Ｔ４－Ｐ２から出土した甕(13)は口縁部をヨコナデした後に外面に刻目を施す。胴部は内外共にヨコハケである。甕(18)は口縁端全体を刻目で加飾しており、そのために口縁端の上下は軽い波状を呈す。胎部は内外共にハケメ調整で胎土に雲母を含む。

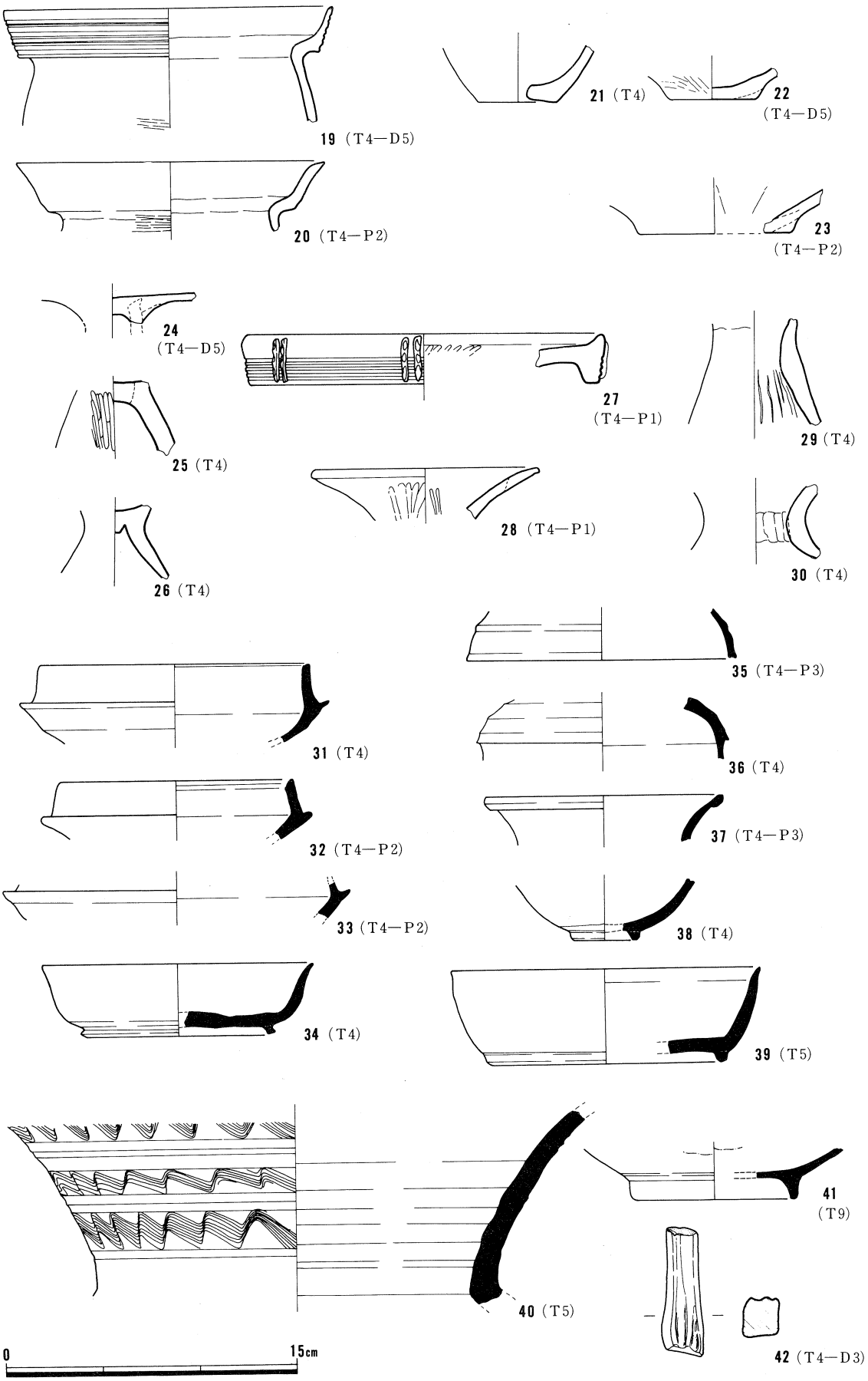
Ⅲ区Ｔ５では須恵器坏身(39)１・甕(40)１、灰釉椀１点出土。甕頸部外面にはややくずれた櫛描波状文を施す(第14図・第15図)。



第13図　Ⅲ区Ｔ４遺構図



第14図　Ⅲ区Ｔ３、Ｔ４出土遺物



第15図　Ⅲ区Ｔ４、Ｔ５、Ｔ９出土遺物

Ⅰ－Ｔ４

甕			高坏	器台	
A_1	B_1	B_2	A_2	C_1	D
1	1	2	2	1	1

Ⅰ－Ｔ５

壺	甕					高坏	器台
C_4	A_6	B_1	B_2	B_3	B_4	A_1	B_2
1	2	1	2	1	1	1	1

Ⅱ－Ｔ３・４

甕					高坏
A_2	A_3	A_4	B_1	B_2	A_2
1	1	1	3	1	1

Ⅱ－Ｔ６・７

壺						甕													
A_2	B_1	B_2	C_2	C_3	E	A_1	A_2	A_3	A_4	A_5	A_6	B_1	B_2	B_3	B_4	B_5	B_7	C_1	C_2
2	2	2	2	1	6	6	6	13	2	5	1	27	7	4	1	6	1	7	8

高坏				器台		
A_1	A_2	B	C	B_1	C_1	D
6	3	1	1	1	2	1

Ⅲ－Ｔ３－Ｄ１

甕		
A_4	A_6	B_2
2	2	1

Ⅲ－Ｔ４

壺	甕		高坏	器台
C_4	A_3	A_4	A_1	D
1	1	1	1	1

Ⅲ－Ｔ４－Ｄ１

壺						甕										高坏	器台	
A_1	B_1	B_2	C_2	C_3	C_4	A_1	A_3	A_4	A_5	A_6	B_1	B_2	B_4	B_6	C_2	A_2	B_2	D
1	2	3	1	1	2	2	2	2	2	1	1	3	2	1	3	2	1	1

Ⅲ－Ｔ４－Ｄ５

壺			甕				器台
C_3	C_4	D	A_3	A_4	A_6	C_1	A_1
1	1	1	1	1	1	1	1

Ⅲ－Ｔ４－Ｐ１

壺		甕						器台	
B_2	C_2	A_1	A_3	A_5	B_1	B_2	B_5	A_1	D
1	1	2	1	4	1	1	1	1	1

Ⅲ－Ｔ４－Ｐ２

甕							
A_3	A_4	A_5	A_6	B_2	B_4	B_6	C_1
2	3	1	1	1	1	1	1

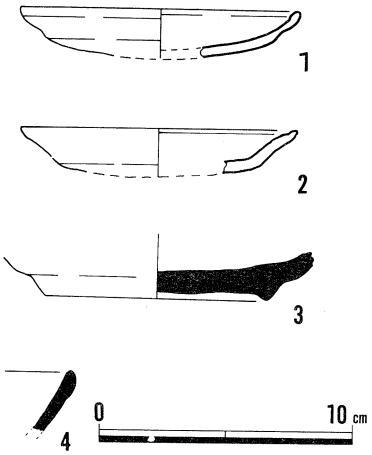
第１表　各トレンチ出土弥生土器個体数

（４）Ⅳ　区

北陸自動車道すぐ西側の排水路計画部分と切土部分に、２×５ｍの試掘壙を31ヵ所設けた。大部分の試掘壙では、耕土下が砂礫土層や、青灰色粘土層で無遺物であった。そのうち土師器片が検出されたＴ３～Ｔ６については、南北に拡張して精査した。

Ｔ１・Ｔ２・Ｔ３では土師器及び須恵器の細片が若干出土したが、明確な遺構はなかった。

ここでは、Ｔ４の遺構図を示したが(第16図)、これも明瞭に人為的と思われるような遺構ではなく、自然流路と思われる３条の溝とピット群のみである。このトレンチでは時代の下がる遺物のみ出土し、灰釉椀２、土師質小皿(1)など２、山茶椀１、白磁椀(4)１、天目茶椀１である。またＴ４－Ｄ４では(2)の土師質小皿片が出土する(第17図)。



第17図　Ⅳ区Ｔ４出土遺物

（５）Ⅴ　区

Ⅴ区と称したのは、唐川集落の北東、湧出山山裾の排水路部分がそれである。東から西南へ６ヵ所のトレンチを設けたが、遺物・遺構は検出されなかった。耕土下においては、Ｔ１で茶褐色砂礫土、Ｔ２・Ｔ３・Ｔ４では茶褐色土で、その下は赤茶褐色粘質土の地山となる。Ｔ５・Ｔ６でも耕土下は厚さ５～10cmの薄い淡黄褐色土で、その下はすぐ地山となる。

（６）Ⅵ　区(塚状遺構)

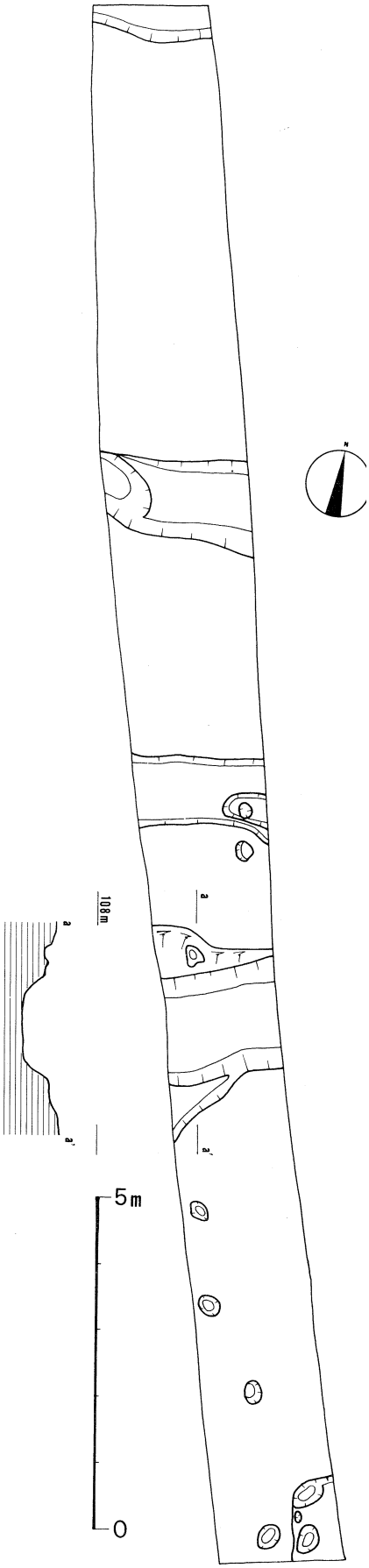
ここは、田面中に長方形の塚状高まりがあり、当初、仮に唐川１号墳と称したところである。

横山集落寄りの条里が良好に遺存する中、条里方向に合わせて16.2ｍ×20.5ｍの規模をもち、高さは約1.2ｍを計った(第18図)。数年前まで桑畑として利用されていたらしいが、現在は荒地のままとなっていた。

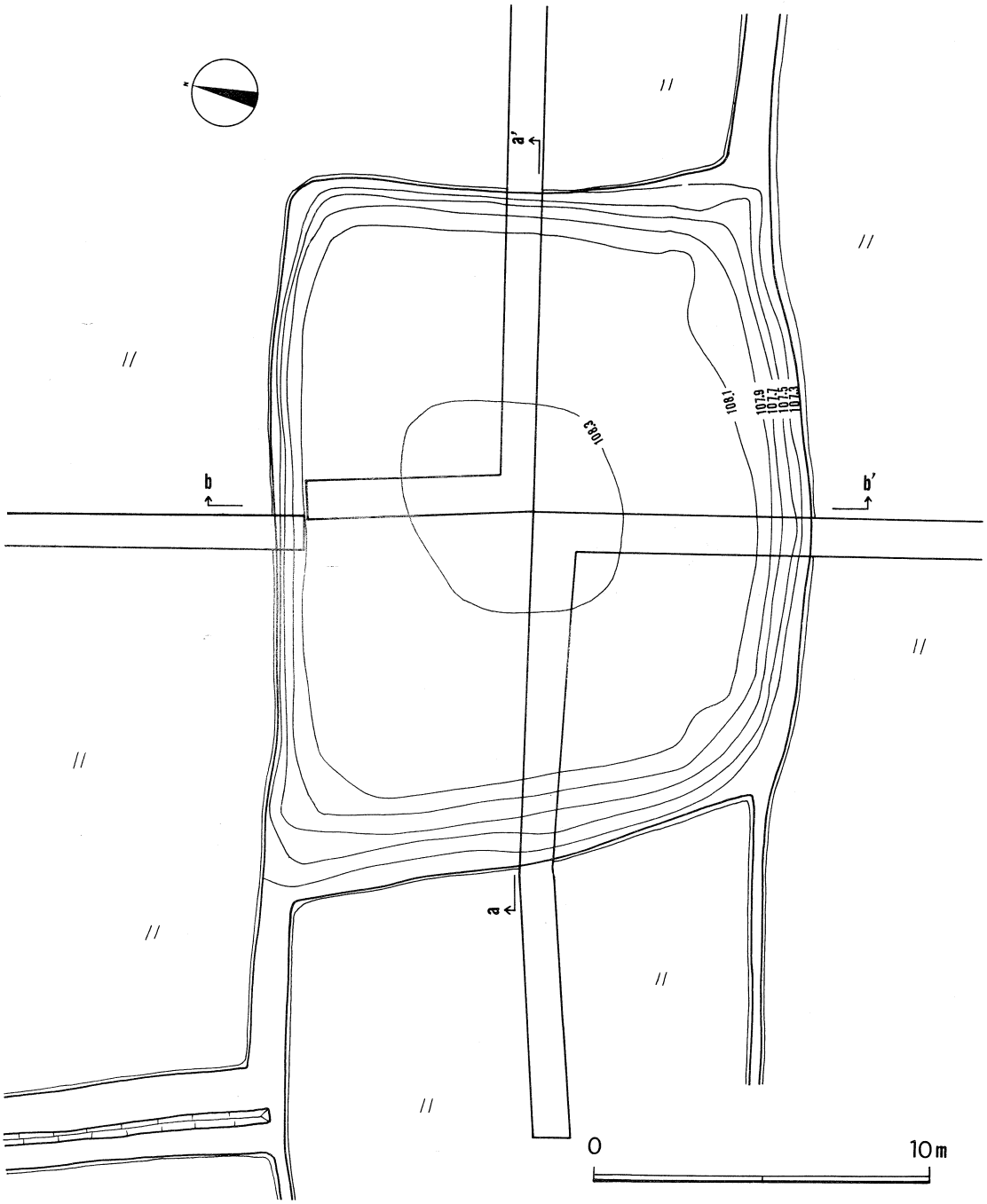
当初、保存のための根拠を得るため、周囲に５本のトレンチを設け、調査を行ったが、耕土下は茶褐色砂礫土層が広がり、古墳の周濠らしいものの痕跡は認められなかった。しかし、土師器の細片が数点検出されたため、墳丘内に十字形のトレンチを設けることにした。

(盛土部分)

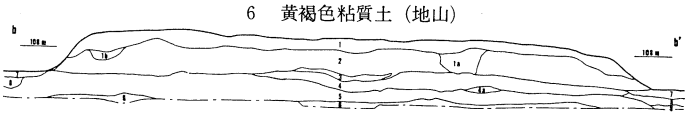
墳丘トレンチの５～10cmの表土(腐触土)をはがすと、一面に５～15cm大の円



第16図　Ⅳ区Ｔ４遺構図

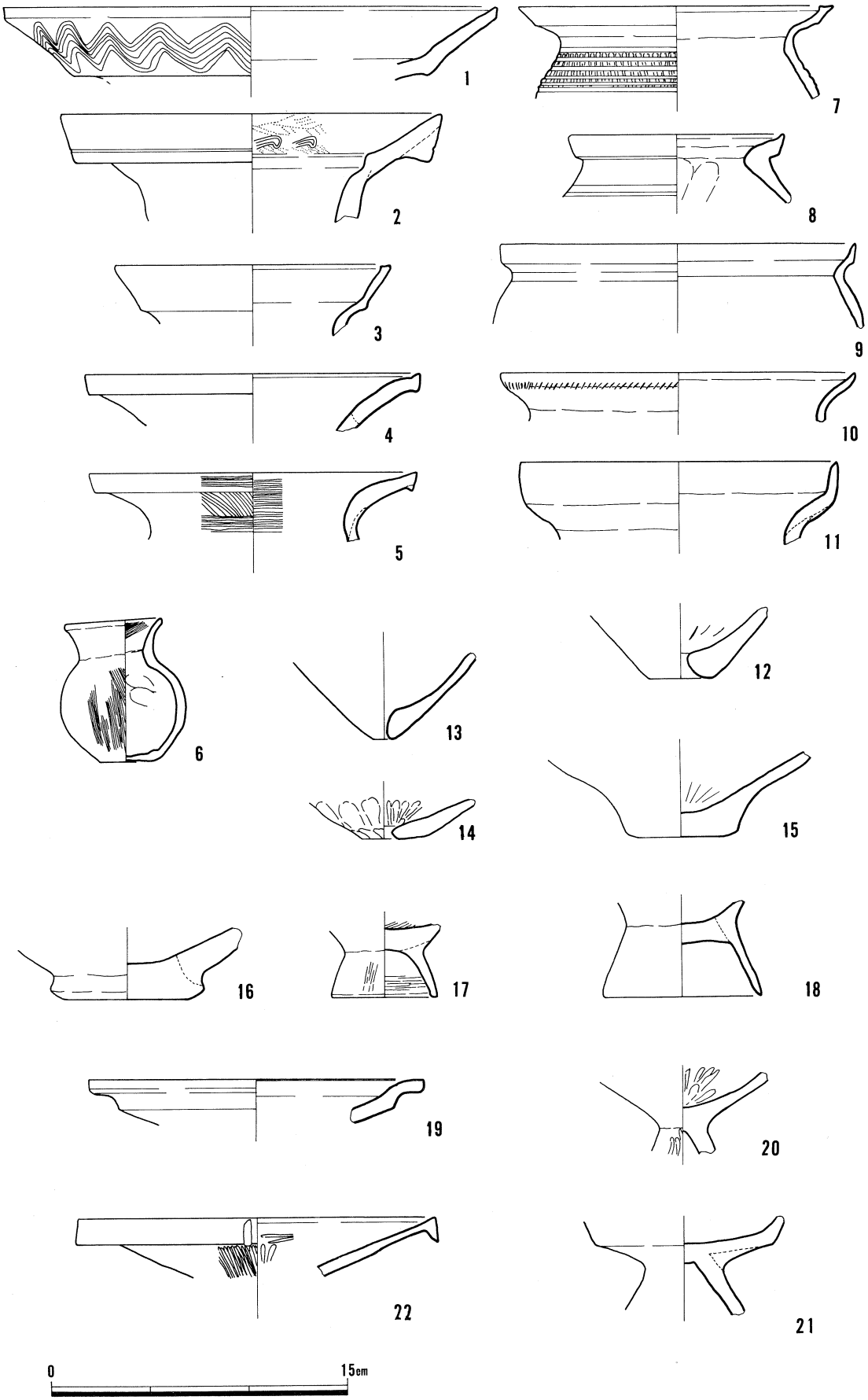


1　茶褐色腐触土（須恵器・灰釉混）
2　黄茶褐色砂礫土（土師器・弥生土器混）
2a　暗褐色砂質土
2b　茶褐色砂礫土
3　黒褐色粘質土（旧耕土・弥生混）
4　茶褐色粘質土（弥生混）
5　暗黄褐色土（弥生混）
6　黄褐色粘質土（地山）
7　灰青色粘土（耕土）
8　茶褐色粘質土（鉄分含）
9　灰褐色砂礫土



1a　礫のみ（既掘・須恵器混）
1b　茶褐色砂礫土
4a　暗黄褐色砂礫土

第18図　Ⅵ区墳丘測量図、横断面図

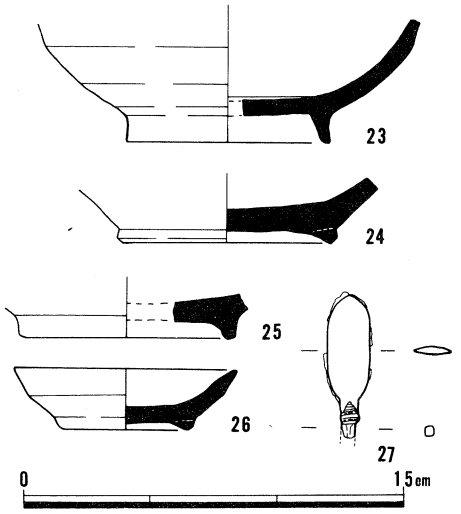


第19図　Ⅵ区墳丘盛土出土遺物（１）

礫が広がり、古墳の葺石とも考えられた。そこでこの面で精査し、写真・図面等の記録を取ったが、その石は並べるという状況とは考え難く、また斜面部分には認められなかったので、更に掘り下げた。

円礫は葺石状を呈さず、茶褐色土中に大量に混在するもので、一部に須恵器片・灰釉陶器片も含み、厚さも30cmから所によっては70～80cmにわたり堆積していた。その下部は基本的に黄茶褐色粘質土となり、大量の弥生土器・土師器片を含んでいた。ほとんど細片でこの塚状遺構は、別地点からの盛土再堆積によって形成されたものと判明した。

壺(1)は幅広い口縁外面にヘラミガキの後、櫛描波状文を施したいわゆるパレススタイルのものである。壺(2)は口縁外面に断面三角形の粘土を貼り付け肥厚させている。内面には櫛描文又は刺突による文様を配し、段を有する。小形壺(6)は乳茶褐色を呈し、非常に細かいハケを器面に施す。甕(7)の胴部上半にはタテの櫛描沈線文の後に横方向の沈線文を施す。甕(8)の内面はヘラ削り。甕底部(12)～(14)は焼成前穿孔で、特に(14)の内面はヘラミガキと言って良いほどになめらかである。脚台(18)の底部外面には指頭圧痕があり、底は充てんしたものと思われる。(19)は底の浅い高坏。薄く長い高台を持つ灰釉椀(23)は内外に濃緑灰色の釉を付着している。(24)の底部は回転糸切りによる。山茶椀(26)の高台部にはモミ痕が残存し、内・外に淡緑灰色の自然釉がかかる。(27)の鉄鏃には軸取り付けの桜の樹皮が残存しており、断面はレンズ形を呈している(第19図・第20図)。



第20図　Ⅵ区墳丘盛土出土遺物(2)

前述のようにこの塚は基本的に大きく２層に盛土されていることがわかったが、こうした盛土も断面を見ると計画的になされたものとは考え難かったが、とりあえず薄く層序ごとにプランを確認しながら、遺物のとり上げを行った。

(盛土下部分)

こうして盛土の除去を地山直上まで行って精査したところ、竪穴住居３軒と掘立柱建物３棟、柵１条そして焼土面が３ヵ所に検出された。中央の竪穴住居はほぼ完存で、これをＨ１、南東部の２軒の竪穴住居は切り合っており、その南は砂礫土層によって攪乱されていた。この古い方をＨ２、新しい方をＨ３、と称した。また掘立柱建物は、東からＢ１・Ｂ２・Ｂ３と呼ぶことにした(第21図)。

これらの掘立柱建物は、Ｈ２・Ｈ３を攪乱している砂礫土層上にも一部、その柱穴が設けられていたため、明らかに竪穴住居より新しい時期のものと考えられた。

(Ｈ１)

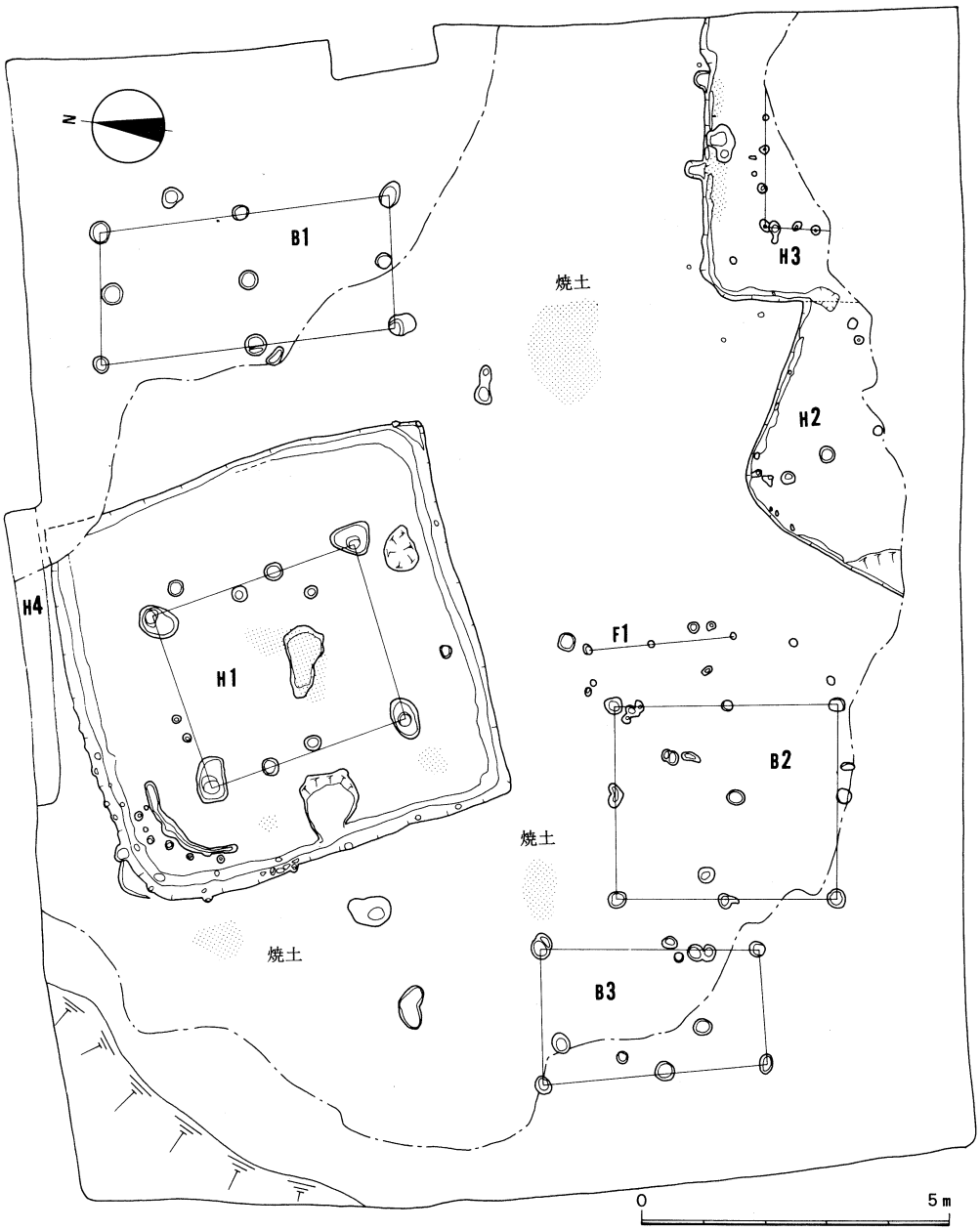
Ｈ１は、6.6m×6.6mの平面方形を呈し、主柱穴を4ヵ所にもつ。また、補助柱穴を東・西に２ヵ所ずつ設けている。中央に浅い凹みをもつ炉跡あがり、焼土がおよそ1.3m×1.2mの範囲に広がる。また、周囲には幅５～20cmの壁体溝を備え、部分的にその壁体溝底に、径約５cm深さ５～10cm程度の小ピットが検出された。更には西側壁体を中心にその上半部にも、住居中央から斜方向に径５cm～10cm程度のピットが穿かれ、屋根を支える垂木のためのピットと判断したが、それらの間隔は、まちまちであり、また集中する部分もあり何回かの垂木を含めた屋根の吹きかえが想定される。

住居床面の北西コーナーには、幅10～20cmの『形の浅い溝も検出され、その溝底にも等間隔に小ピットの痕跡が認められた。更に西側辺中央付近で壁体溝につづく形で、不定形の深さは10cm足らずの凹みが検出された。これは一般に貯蔵穴と称されているものである(第22図)。

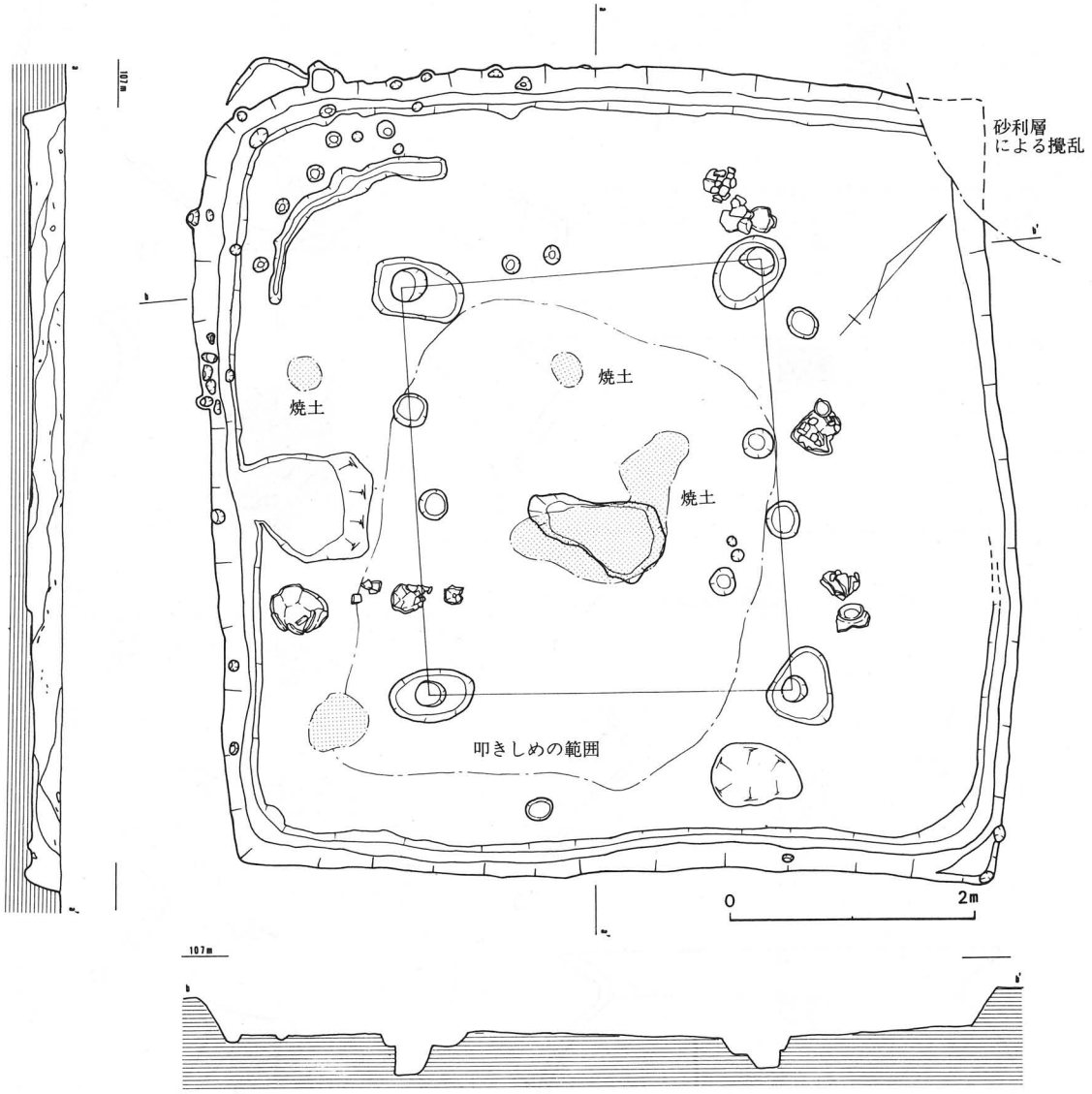
Ｈ１では壺$C_1$１・甕$A_2$１・甕$B_1$５・甕$B_2$２・甕$B_3$１・甕$B_5$１・高坏Ｃ１・脚台１と甕底部４・高坏脚部２・器台脚

部１点床面および若干上部より出土した。

壺(1)は口縁内面から胴部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリによるやや外反気味の直口縁を持つものである。受口



第21図　Ⅵ区遺構配置図



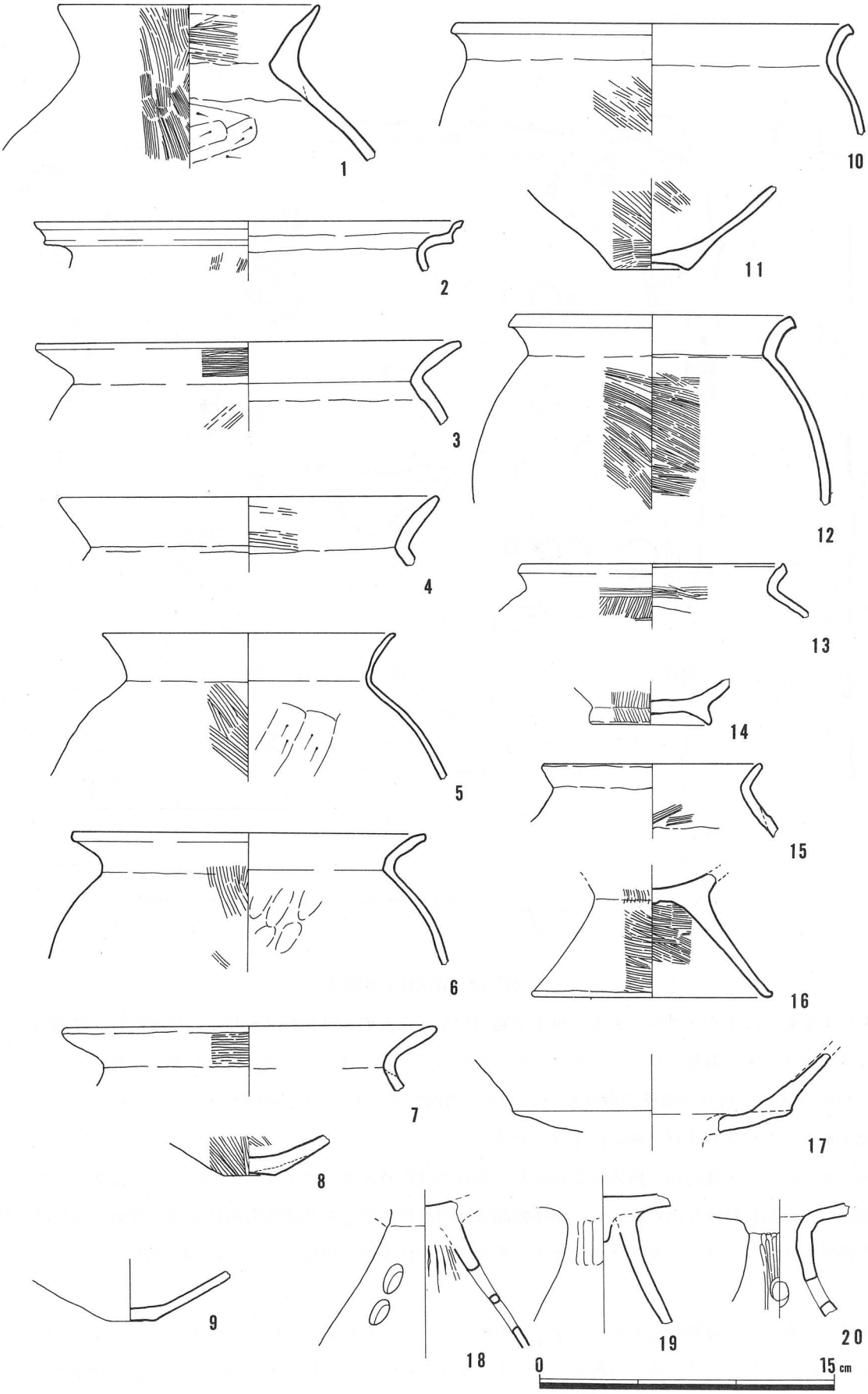
第22図　Ⅵ区Ｈ１遺構図

状口縁を呈するものは１点(2)のみである。出土土器の約半分を占める甕Ｂ類(3)～(15)には口縁内外～胴部ハケメ調整のものと、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ又はヘラケズリのものがある。Ⅱ区などでは後者の比率が高かったが、Ｈ１ではB_1の３点及びB_3が前者、残りの器壁の薄いもの(5)・(6)が内面ヘラケズリ、B_2(10)・(12)が内面ハケメとなっている。甕(13)は口縁端部上面を少しつまみ上げ気味に仕上げている。

(7)・(8)、(10)・(11)、(13)・(14)は同一個体と思われる。脚台(16)は内外面共ハケメ又はナデによって入念に仕上げられている。端部外面につまみ出した張り出しをもつ。高坏脚部(18)は円形のスカシを２段３方向にもつ。内面にはしぼり目が残存する。器台脚部(20)は内外ヘラミガキ又はヘラケズリ等で入念な仕上げが行なわれている(第23図)。

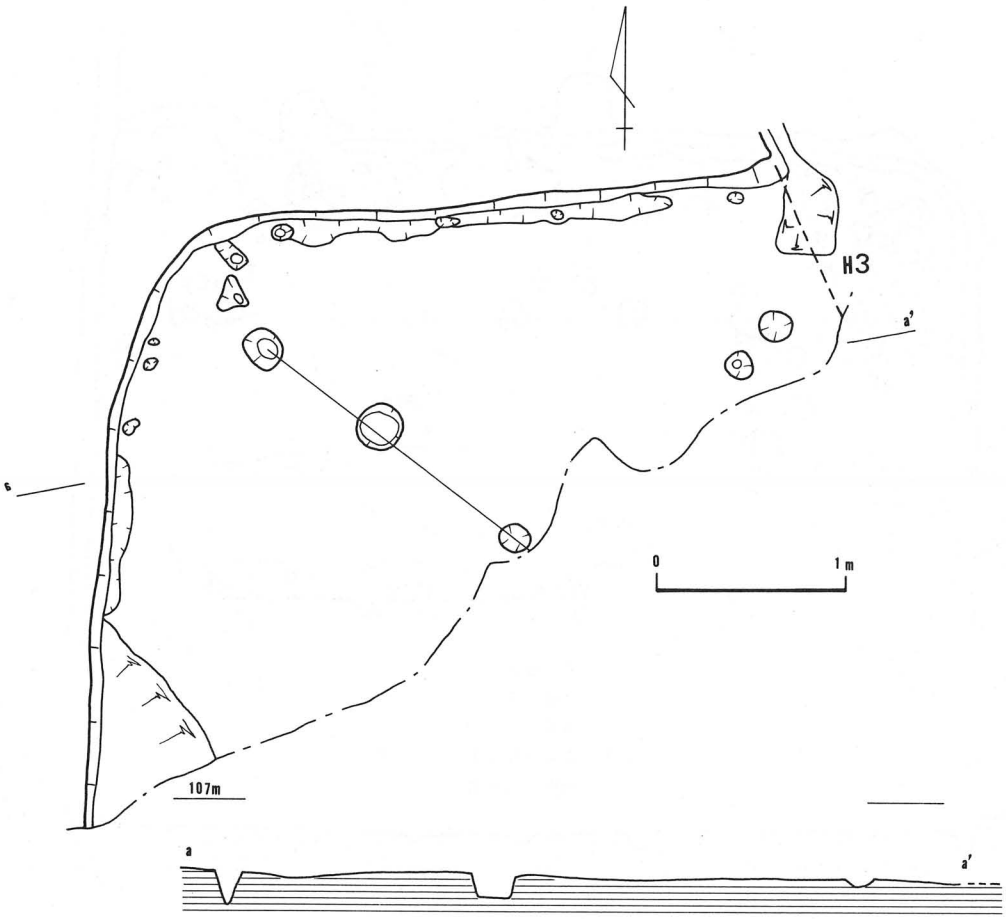
(Ｈ２)

Ｈ２は隅丸方形になる可能性もあるが、規模は明確でない。またＨ１の主柱穴に匹敵するほど柱穴は見当らなかったが、上屋構造のための柱穴は３個、対角線ライン上に検出された。またＨ１より浅いながらも、壁体溝も備え、その溝底にはＨ１で見られたような小ピットも認められた。現床面は周囲より５cmのレベル差をもつだけで、すでに上面は攪



第23図　Ⅵ区１号竪穴住居（Ｈ１）出土遺物

乱されていると考えられ(第24図)、出土遺物も細片が数点埋土から検出されたのみで図示するに至らなかった。



第24図　Ⅵ区Ｈ２遺構図

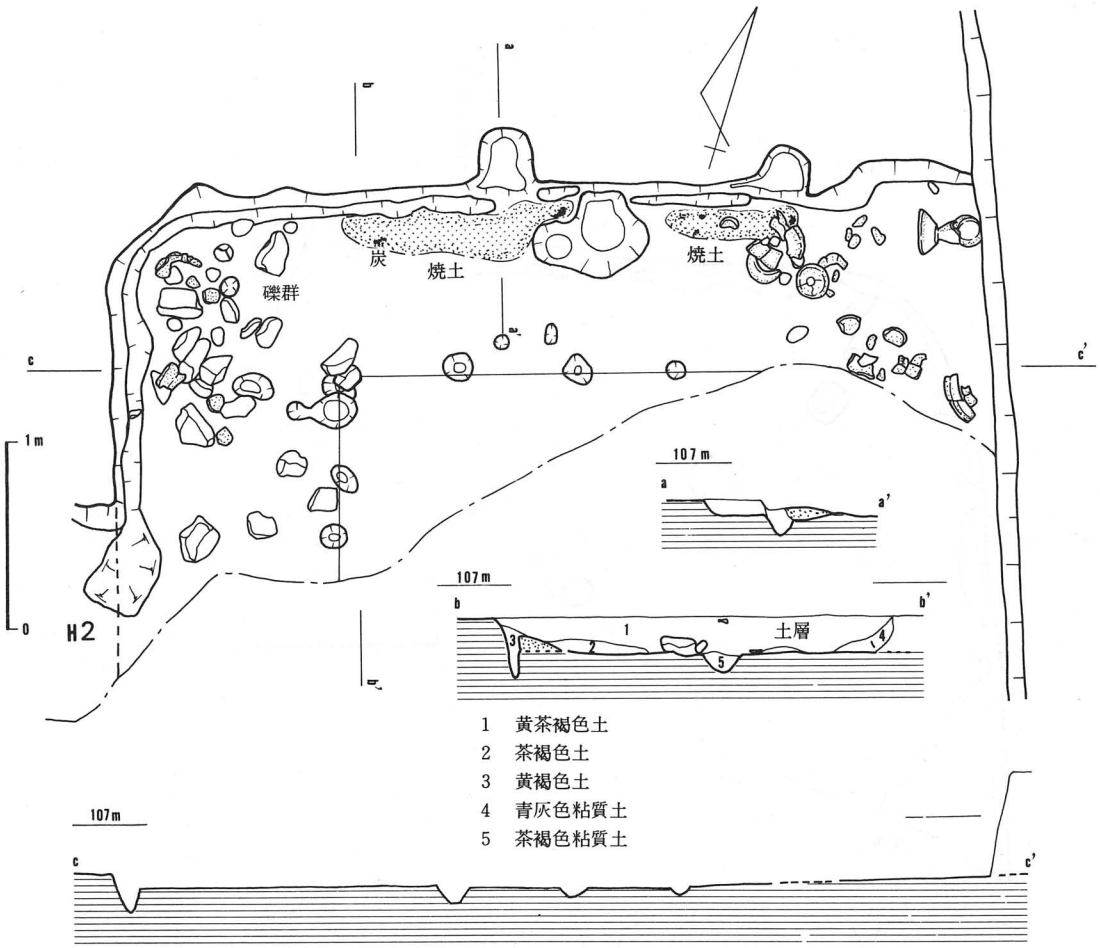
(Ｈ３)

平面おそらく方形を呈すると思われるが、南半はすでに砂礫土層により攪乱をうけ、不明である。この住居址埋土西半部において、約20個の円礫が検出された。この円礫群中には、炭・灰が混在し、この住居が埋まる以前に、屋外で炉として使用したものが落ち込んだものとも考えられる。

北壁中央付近には、舌状の深さ10cm程度に掘りくぼめた張り出しが２ヵ所認められ、それと対応するように住居址床面の２ヵ所に炭を伴う厚さ８cmの焼土面が広がる。西側のものは図にその断面を示したが、床面を若干掘りくぼめ、舌状張り出しの掘り込みは、煙道部状を呈する。従ってこれは、住居地北縁につくりつけられた炉跡と考えられる（第25図)。

Ｈ３からは甕A_3・甕A_5・高坏Ｃ・器台Ａ・器台C_1・C_2が各１点ずつと高坏脚部１・器台脚部１・甕底部５点が床面より出土した。甕はどちらも口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケによる調整である。東海系の鉢(8)と高坏(9)は明らかに出土状態からみてセットをなす。(8)はゆるやかな「く」字状口縁にヨコハケによる多少いびつな体部をもつ。(9)は内外共にヘラミガキが施され、入念に仕上げられている。この両者は黒っぽい細砂を含み淡灰褐色の色調を呈する器壁の薄いものである。

器台(11)はゆるやかな受部を持つもので、内外に綿密なヘラケズリが見られる。器台(13)は櫛描沈線文の上に３本１単位



第25図　Ⅵ区Ｈ３遺構図

の棒状浮文を４方向に備える。脚台⒁は外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデで、かなり平滑に仕上げられている。暗灰色を呈し、⑻・⑼に類似する。なお、⒀・⒁は同一個体である。底部破片⑺には粘土紐をドーナツ状に貼り付けた痕跡が残る（第26図）。

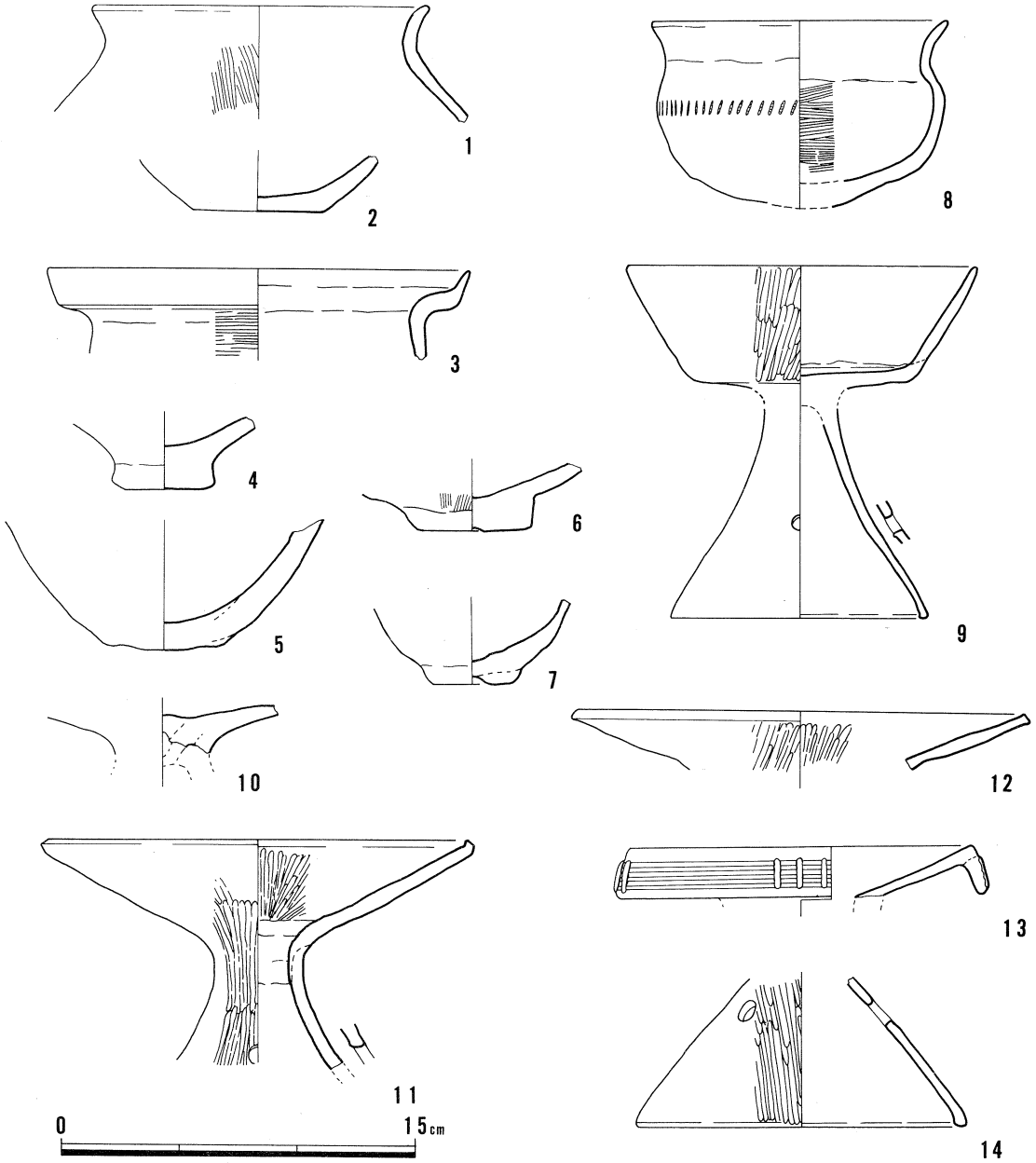
第２表　Ⅵ区Ｈ１遺物観察表

No.	器種	形態の特徴	整形の特徴	胎土	色調	残存	備考
1	壺C_1	頸部の内面屈曲部は厚い 外反気味の直口縁。	外面はやや雑なタテハケ 口縁内側はヨコハケ、 胴部内面はヘラケズリ。	～２mmと５mm大の砂を含む 赤砂あり。	内　乳灰褐色 外　〃	1/1	
2	甕A_2	口縁上端を丸くおさめる。 内面に粘土継ぎ目痕残存。	胴部外面タテハケ、 口縁～内面ヨコナデ。	～１mmの砂を含む。	内外共 黄灰白色	1/6	
3	甕B_1	口縁上端を丸くおさめゆくの字状に屈曲し、頸部内面に綾を持つ。	口縁内外共ヨコハケ、胴部外面斜行ハケ、口縁端・胴部内面ヨコナデ？	～１mmの砂を含む。	内　乳茶褐色 外　黄茶褐色	1/8	
4	甕B_1	口縁上端を丸くおさめる。 屈曲部がやや凹む。	内外共ヨコハケ。	～３mmの砂を含む。 赤砂あり。	内外共 黄灰白色	1/8	
5	甕B_1	やや外湾気味。 器壁は薄い。	口縁内外共ヨコナデ？ 胴部外面ハケ目、内面は荒いヘラケズリ。	～５mmの砂を含む。 赤砂あり。	内外共 黄灰褐色	1/4	

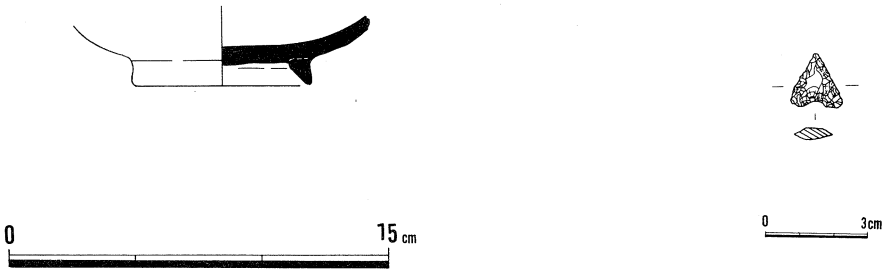
6	甕B₁	口縁端を丸くおさめ、屈曲部内面に綾を持つ。	口縁内外ともヨコナデ？ 胴部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	～3㎜の砂を多量に含む。	内　磨滅のため黒色 外　乳灰褐色	1/6	
7	甕B₁	くの字状に湾曲するが、内面に明瞭な綾は持たない。	口縁外面ヨコハケのちヨコナデ？　口縁内～胴部内面ヨコナデ？	～2㎜の砂を含む。	内外共 乳灰褐色	1/8	8と同一個体か
8	甕B₁	底はやや凹む平底。	胴部外面ハケ目、内面時計回りのやや荒いハケ目。	～1㎜の砂を含む。	内　乳灰褐色 外　暗灰褐色	1/1	7の底か
9	甕	底はやや凹み気味の平底。 ゆるやかに外方にたち上る。	外面ナデ？　内面不明。	3～4㎜の砂をかなり含む。	内外共 赤褐色	2/3	
10	甕B₂	口縁端下端に、つまみ出したような張り出しを持つ。	口縁内外共ヨコナデ？ 胴部外面斜行ハケ目、内面ハケ目？	～3㎜の砂を含む。	内　濁茶褐色 外　茶褐色	1/10	11と同一個体か
11	甕B₂	かなり凹んだ平底、ややくせをもちながら上方にひろがる。	底部側面は、こまぎれのヨコハケ。胴部内外共ハケ。底部ヨコナデ。	～3㎜の砂を含む。 赤砂あり。	内　黄灰褐色 外　茶褐色	1/1	10の底か
12	甕B₂	外湾気味のくの字状口縁で、内面に綾を持つ。 口縁端下端に張り出しを持つ。	口縁内外共ヨコナデ。 胴部内外共、細い斜～横方向のハケ目。	～3㎜の砂を含む。	内外共 茶褐色	1/2	
13	甕B₃	口縁端を平担に仕上げ、上端を少しつまみ上げ気味。	口縁内外共ヨコハケ。 胴部外面タテハケ。 内面ハケ後ナデ。	1㎜大の砂をわずかに含む。 金雲母あり。	内外共 灰褐色	1/2	14と同一個体
14	甕B₃	高台風の短い脚がつく。	底部外面ナデ。 脚～胴部外面タテハケ。 胴部内面不明。	13に同じ。	13に同じ	2/3	13の底か
15	甕B₅	短か目のくの字状口縁。内面に綾を持たない。胴部はハの字状に下方に開く。 胴部に黒斑あり、粘土紐の継ぎ目残存。	胴部外面デコボコしている、内面ハケ後ナデ。 口縁内外共不明。	2～3㎜大の砂を含む。	内　赤褐色 外　暗赤褐色	1/8	
16	脚台B	外湾気味に下方に開く。 端部下端は丸くおさめ、上端はつまみ出した様な張り出しを持つ。 底部外面中央部がやや突出。	外面屈曲部タテハケ、その下方5㎜程度はハケ後ナデ。脚台外面ヨコハケ、内面上半はハケ目、下半はハケ後ナデ消し。内面には黒斑あり。	1～3㎜大の砂砂をかなり含む。 長石あり。	内　暗褐色 外　灰褐色	4/5	
17	高坏C	屈曲部は張り出し気味に綾を持ち、外上方に開く。	内外面共不明。	～2㎜の砂を含む。 赤砂あり。	内　乳灰褐色 外　黄灰褐色	1/6	
18	高坏C	円形2段のすかしが3方向に穿孔。	外面は不明。 内面上部にしぼり目、下部はナデか？	2～3㎜の砂をかなり含む。 荒い土。	内外共 淡黄褐色	2/3	
19	高坏	やや外湾気味に下方に開く。 差し込み、坏部は逆八の字に上方に開くか？	外面上部に面取り風のタテ方向のナデ。 その他は不明。	～1㎜の砂をわずかに含む。	内外共 赤茶褐色	1/1	
20	器台	くびれ部に、粘土継ぎ目による段差がある。 楕円に近いすかしが4方向に穿孔。	外面ヘラミガキ。受部内面ヘラミガキ？　くびれ部内面ヘラケズリ？　脚部内面ヨコナデ？	～3㎜の砂をわずかに含む。 赤砂あり。	内外共 淡灰褐色	1/1	

第３表　Ⅵ区Ｈ３遺物観察表

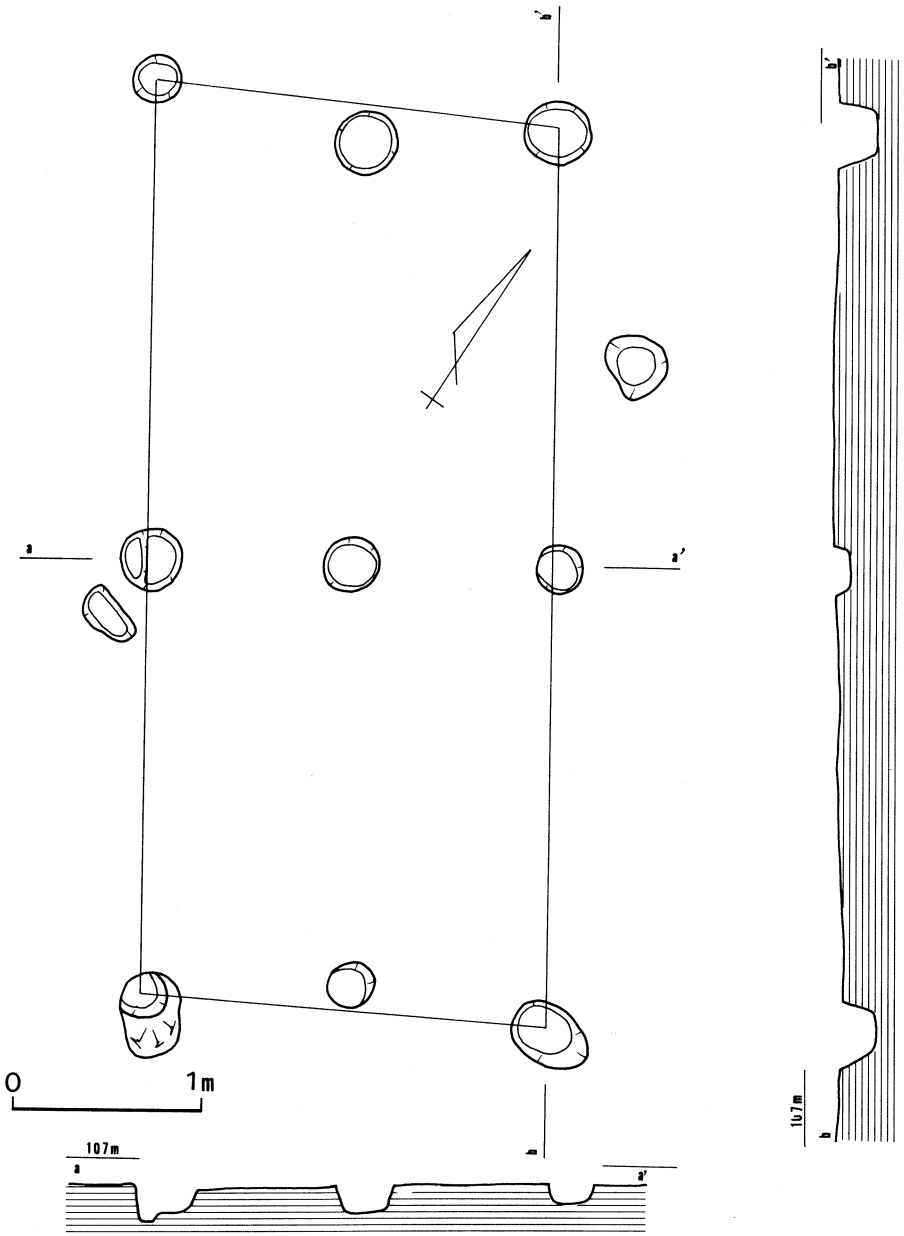
No.	器種	形態の特徴	整形の特徴	胎土	色調	残存	備考
1	甕B_5	口縁は、やや外反気味に、ゆるやかに開く。 口縁端は、丸くおさめる。	口縁部内外共ヨコナデ？ 胴部外面タテハケ、内面ナデ？	２～３㎜大の砂を含む。	内　淡灰黄色 外　淡赤褐色	1/10	２と同一個体？
2	甕	平底、底部付近に黒斑あり。	内外共調整不明。	２～３㎜の砂をかなり含む。荒い土。	内　淡灰褐色 外　淡黄褐色	2/3	
3	甕A_3	外上方に開く受口状口縁、口縁端は、つまんでおさめる。	口縁内外共ヨコナデ？ 頸部～胴部ヨコハケ。 胴部内面不明。	～３㎜の砂を含む赤砂あり。	内外共 明茶褐色	1/3	
4	壺	くびれがややすぼみ、平底に続く。	底部　乱方向のケズリ？ 周囲は、あまり調整が加えられていない。 その他は不明。	～１㎜の砂と５㎜大の砂を若干含む。	内　乳灰褐色 外　灰褐色	1/1	
5	甕	凹凸を持ちながら平底に近い形態を持つ。	磨滅著しく、調整は不明。	～３㎜の砂を含む。	内外共 乳灰褐色	1/1	
6	壺	底部中央部が少し凹み気味。	くびれ部に、ハケ後ナデ。 その他不明。	～２㎜の砂を少し含む。	内　暗灰色 外　灰褐色	4/5	
7	甕	粘土紐をドーナツ状に巻き、底部に貼りつける。胴部はやや内湾気味に立ち上がる。	胴部外面ヘラケズリ？	～３㎜の砂を含む。	内　黒灰色 外　暗灰褐色	1/1	
8	鉢Ａ	ゆるやかに外反し、口縁端を丸くおさめる。胴部は凹凸が著しい、内外共、胴部上半に黒斑を持つ。	口縁内外共ヨコナデ。 胴部外面　斜～横方向のハケ、上半にハケ状工具による刺穴文。 胴部内面　ヨコハケ。	１～２㎜の黒っぽい細砂をわずかに含む割と良好な土。	内　灰褐色 外　淡灰褐色	4/5	９とセットを成す
9	高坏Ｃ	円形のすかしが１方向にのみ穿孔。裾部は、内湾気みに下方にひろがり、端部端は平担に仕上げ、内面にややつまみ出す。 坏部は、ほぼ水平な坏底部から逆八の字状に上方にひろがる。 内面に、粘土紐の継ぎ目残存。	坏内外、脚外面ヘラミガキ。 脚部内面ナデか？	黒っぽい細砂を含む。	内外共 淡茶褐色	ほぼ完形。首が欠損	８とセット
10	高坏	差し込み式。	外面ヘラミガキ。 内面不明、器面は雑である。	～３㎜の砂を含む。 赤砂あり。	内外共 乳灰褐色	1/1	
11	器台 C_2	口縁上端は、内面につまみ上げ張り出しを持つ。 脚部内面に粘土継ぎ目残存。	口縁・脚部内面ヨコナデ。 その他はヘラミガキ。	～２㎜の砂を含む。	内　濁灰褐色 外　暗茶褐色	箇部で 1/1	
12	器台 C_1	口縁端面を平担に仕上げ、上・下端に弱い張り出しを持つ。	口縁ヨコナデ。 その他内外共ヘラミガキ。	～２㎜の砂を含む。	内外共 濁灰褐色	3/4	
13	器台 A_1	かえりが外方にひらく。 ３本１単位の棒状乳文を４方向に持つ。	かえり部４条の櫛描沈線文の上に、棒状浮文を貼り付ける。 外面おそらくヘラミガキ。 内面不明。	１㎜大の砂をかなり含む。 石英あり。	内　淡赤褐色 外　淡褐色	1/1	14と同一個体か?
14	脚	内湾気味に下方にひろがり、端部内面に張り出しを持つ。 円形すかしが３方向に穿孔。	外面ヘラミガキ。 内面ハケ後ナデ、かなり平滑。	～１㎜の砂をわずかに含む精良な土。	内　暗灰色 外　灰黄褐色	1/1	



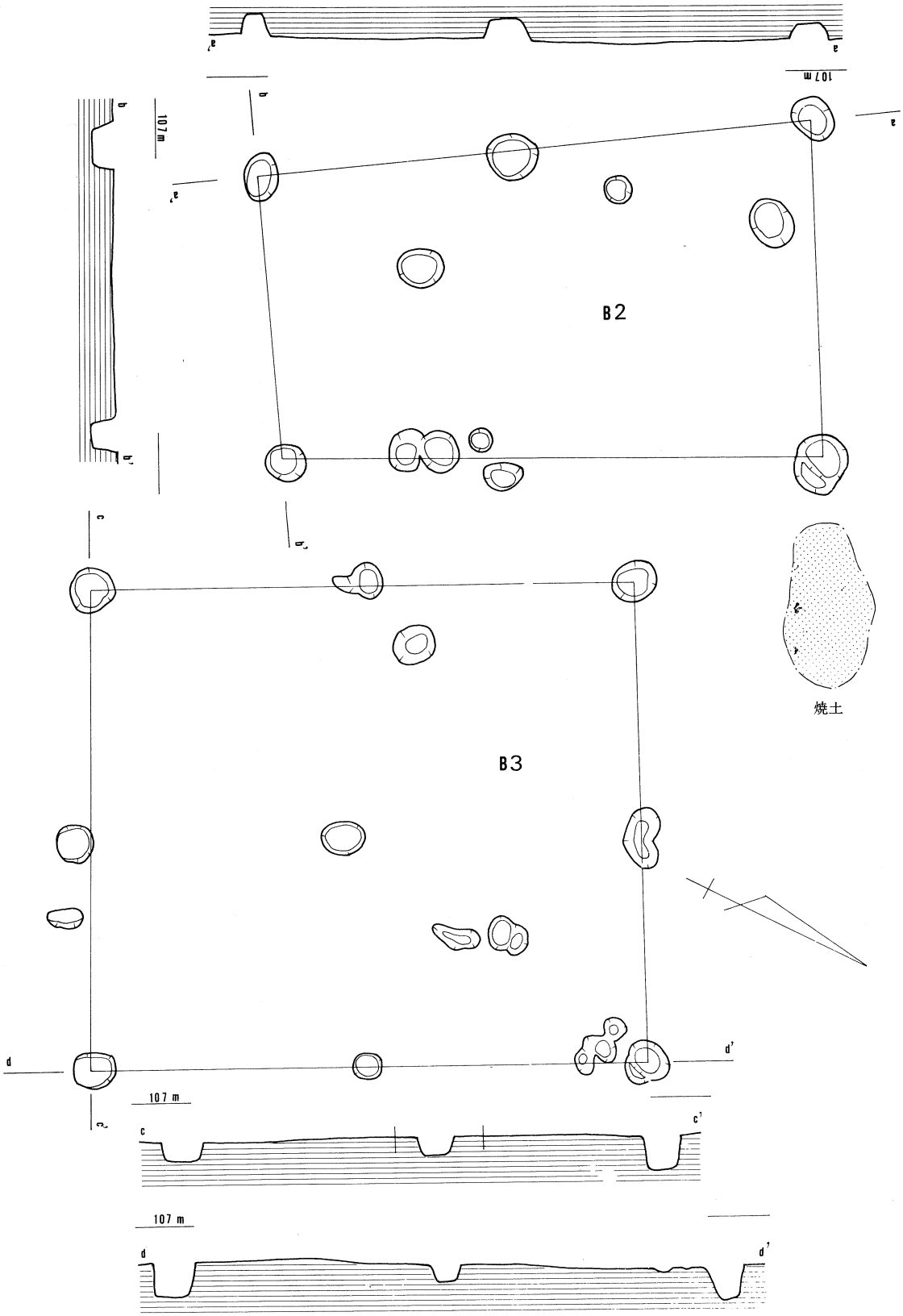
第26図　Ⅵ区３号竪穴住居（Ｈ３）出土遺物



第27図　Ⅵ区遺構面出土遺物



第28図　Ⅵ区Ｂ１遺構図



第29図　Ⅵ区Ｂ２、Ｂ３遺構図

（Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３）

Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３と称した掘立柱建物は１×２間と２×２間の規模をもち、方位は３棟ともほぼ北にとる。正確にはそれぞれ、Ｎ－35°－Ｗ、Ｎ－26°－Ｗ、Ｎ－26°－Ｗとなる（第28図・第29図）。

柱穴掘り方は全て径20～40cmまでで、遺構面からの深さも20cm程度であり、柱穴等は遺存していなかった。柱間の心と距離はほぼ160～220cmの間におさまる。

周囲に見られた３ヵ所の焼土面は３～５cmの厚さで堅く焼きしまっていた。このうち北西部の焼土ののる土層はＨ１を検出する際、Ｈ１の上に薄くかぶさっており、この土を除去したことによってＨ１北西隅の輪郭が明瞭になったことから、明らかにこの焼土面はＨ１より新しい時期のものであり、これら３ヵ所の焼土面は掘立柱建物群に伴うものと考えられた。

また、Ｂ２西方で柵痕跡が確認された。

掘立柱建物の相互の時期的な先後関係は明らかではないが、先述した北西隅の焼土面のすぐ横で同一レベルで山茶椀が１点出土した（第27図）。また現地説明会の際、サヌカイト製石鏃を１点採集した。重さ　ｇを計る。

これは東濃産と思われ長石をわずかに含む精選された土を用い、内外共に灰白色を呈する。11世紀後半のものであろう。おそらくこれが掘立柱建物の存続期の一点を示すものと考えられ、建物の規模や柱穴掘り方の大きさ等からも大方の賛意が得られよう。

５　おわりに

（立地）

今回の調査によって、唐川集落の南水田中に、かなり広い範囲にわたり弥生時代後期から平安時代までの遺物が散布することが明らかになった。

横山集落寄りでは石鏃１点だけの検出ではあったが、獲物を追って沖積地までやってきた縄文時代人の痕跡も認められ、Ｉ区Ｔ５での瓦の分布は、その周辺での瓦葺建物の存在を示すものであった。特にII区Ｔ６・７付近での大量の包含層中の土器群とVI区の住居址群は弥生時代後期後半ごろを中心に、現集落の如く、北と南の二つの集落の存在を示すものである。

現在の高月町の周辺地形は高時川によって形成された扇状地・氾濫原それにその中に点々と在る自然堤防、余呉川右岸の後背湿地からなる。これまで弥生時代遺跡は扇状地上の大海道遺跡[(1)]・井口遺跡、余呉川左岸にあたる自然堤防上の妙光庵遺跡・円通寺遺跡等[(2)]が土器の出土によって断片的に知られてきただけであり、唐川遺跡はこの地域の沖積地上によって初めての集落遺構検出である。

これまで知られてきた遺跡の分布と近年行なわれつつある上水道事業に伴う立会調査の所見[(3)]によると、弥生時代の遺跡はほとんど氾濫原中に島状に在る自然堤防上にのる形をとり、また現在の集落とほとんど重複する。従ってこれまでの調査がこれら周落の周辺に限られてきたことが、明瞭な遺構検出を見なかった一つの原因であろう。

（竪穴住居）

VI区で調査した３軒の竪穴住居は全て幅５～10cmの壁体溝を備え、その溝底に径５cm程度の小ピットが検出された。その相互の間隔を復元すると60～120cm程度であると考えられ、溝内に縦方向に立てられていた杭の痕跡であることはまちがいないものである。従って住居内周囲の溝はすでに壁体溝と呼称しているように住居の排水溝であることは否定され、これまで言われているように、これは竪穴住居の壁を保持する板材（？）を差し込むためのものであり、また遺構小ピットはこの板材の支持杭痕と考えられる。

こうした平面方形の竪穴の四隅や中間に杭を打って横木を架し、縦板・横板・網代などの化粧材を支える方法は大型住居に限られるという。[4] 宮本長次郎はこの大型住居に特別な意味を持たせようとしているのであるが、少くとも唐川遺跡で調査した3軒の住居は全て周溝内に小ピットを備えていた訳で、そうした意見はここでは保留しておくことにする。

また遺存状況の良好だったＨ１では、その壁の上部に住居中心から斜方向に穿かれた小ピットがほぼ四周に見つかり、径５～10cm程度の垂木を差し込んだ痕跡と考えられる。それぞれの間隔はまばらで、何回かの垂木の位置を変えた葺き換えも認められるようであるが、およそ垂木間は60～80cmと推定し得る。こうした垂材の痕跡は、例えば奈良県唐古・鍵遺跡で住居の周縁で検出され、これは45度の角度で架けられ垂材の径は３cmであるという。[5] また最近の例では、島根県高広遺跡で垂木を埋めこんだ側溝をもつ住居が検出されている。[6]

Ｈ１の北西コーナーに近いところで検出されたＬ形の溝とその底の小ピットは間仕切りのためのものであろう。

ところでＨ１は中央に炉、一辺のほぼ中ほどに貯蔵穴をもつ比較的定型化した形態である。しかしＨ３の北壁で見られた２ヶ所の浅い凹状上に焼土塊は明らかに煙道部状の施設を備えたカマドに近いものである。石野博信によるとこうした「カマドの初現型」である「類カマド」は近畿地方を中心に弥生時代後期に現われるとされ、大阪府観音寺山遺跡例や鷹塚山遺跡例などをあげている。[7] 特に観音寺山遺跡例では100軒以上ある住居址の中の１基にだけ見られるものであり、唐川遺跡と同様に一遺跡中の全ての住居址がこうした「類カマド」を備えるのではないようである。

（弥生土器）

竪穴住居出土土器の編年的位置づけについて簡単に触れてみる。[8]

Ⅵ区Ｈ３出土土器の中心をなす一群の土器は、唐古第五様式第一亜式並行期の次の段階にあたり、Ｈ１出土土器はやや新しい特徴を有する。

Ｈ３出土資料並行期は、高坏についてみるといわゆる欠山式に特徴的な深い坏部をもち、内湾する脚部を備えるものが出現するが、口縁が外反する通有の高坏も残存する。器台の口縁は直線的に伸びるが、口縁端は垂下し沈線を施した口縁帯を持つものが主となりつつある。受口状口縁を有する甕では、口縁端を外方につまみ出すものと出さないものが共存し、明瞭な平底を有する。ただ湖北地方では受部より上が単につまみ上げ気味に伸び、肩も張らないいわゆる受口状口縁甕とは異なるものが主流をなす。またこの期の新しい相として、月影式に特徴的な擬凹線を口縁に備えた甕がやや小形のものとして出現する。

この期の他の資料として野州町下々塚遺跡ＳＩ11や北大津遺跡黒褐色土下層Ｊ・Ｋ区[9]出土資料[10]の一部などがあげられる。また当該期といわゆる庄内式並行期との間には更に２型式存在し、湖北では高月町円通寺遺跡第Ⅲ地区ＭＩ・長浜市高田遺跡第５層[11]、湖南地方では下々塚遺跡ＳＩ12[12]・湖西線Ⅳ区３号住居址出土資料[13]等によってこのことは認識される。[14]

註

(1) 田中勝弘「高月町保延寺大海道遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 Ⅲ―Ⅰ 1976年

(2) 田中勝弘「高月町円通寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 Ⅲ―Ⅱ 1976年

(3) 用田政晴『高月町上水道事業に伴う埋蔵文化財調査概要』Ⅱ 1983年

(4) 宮本長次郎「住生活」『日本考古学を学ぶ』(2) 1979年 257頁

(5) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第16冊) 1943年

(6) 丹羽野裕氏の御教示

(7) 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探求・家』 1975年 92～93頁

(8) 資料操作については、モンテリウスの研究法に対する田中琢の理解（「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ』(1) 1978年

12～23頁）等が参考になった。

(9) 伊達宗泰ほか『下々塚遺跡発掘調査報告書』1981年

(10) 中西常雄『北大津の変貌―弥生時代から古墳時代へ―』1979年

(11) 註(2)に同じ

(12) 宮成良佐『高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書』1980年

(13) 註(9)に同じ

(14) 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』1973年

図　　版

遺跡全景（北から）

Ⅰ区Ｔ５（北から）

Ⅰ区Ｔ５（南から）

Ⅰ区Ｔ10（北から）

Ⅱ区Ｔ６・７遺物包含状況

Ⅲ区Ｔ３（北から）

Ⅵ区墳丘全景

Ⅵ区墳丘トレンチ調査

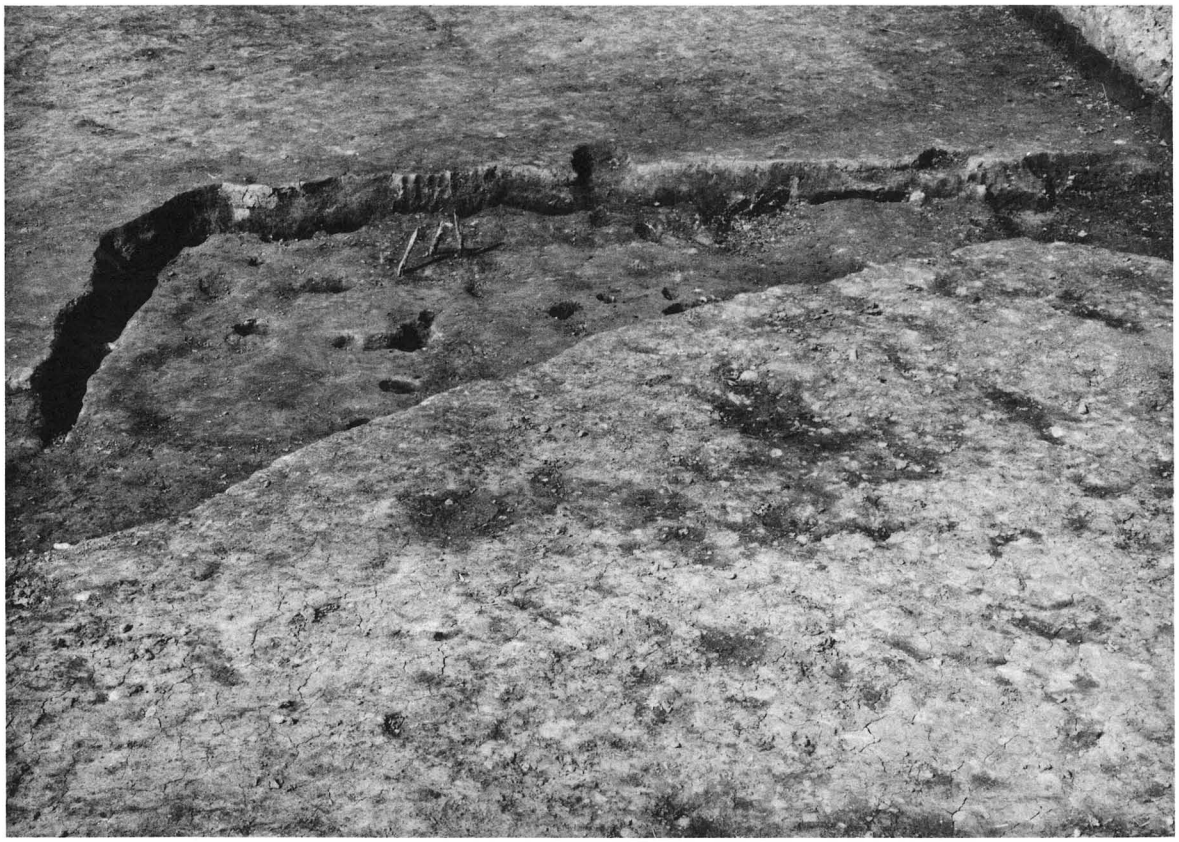
Ⅵ区墳丘断面（北から）

Ⅵ区遺構検出状況（南から）

Ⅵ区Ｈ３遺物出土状況

Ⅵ区Ｈ３遺物出土状況

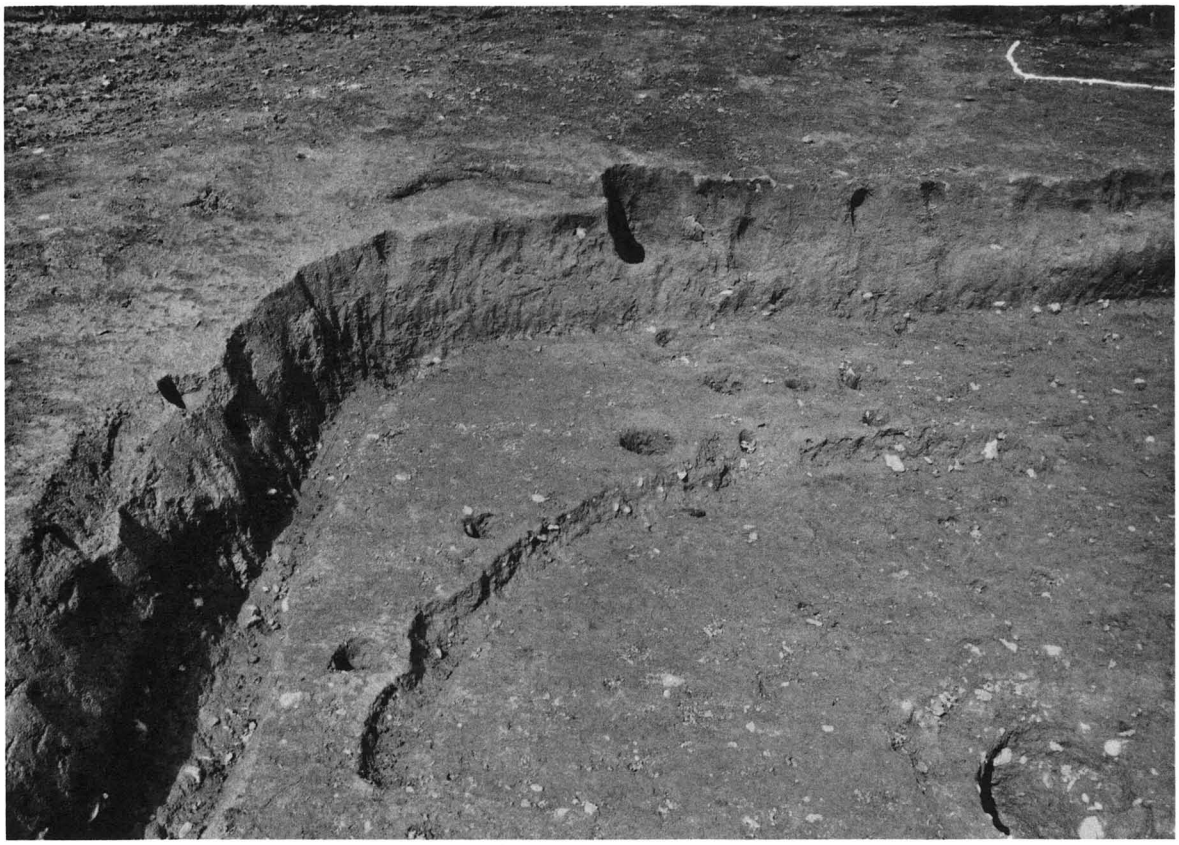
Ⅵ区Ｈ３近景



Ⅵ区Ｈ３完掘後（南から）

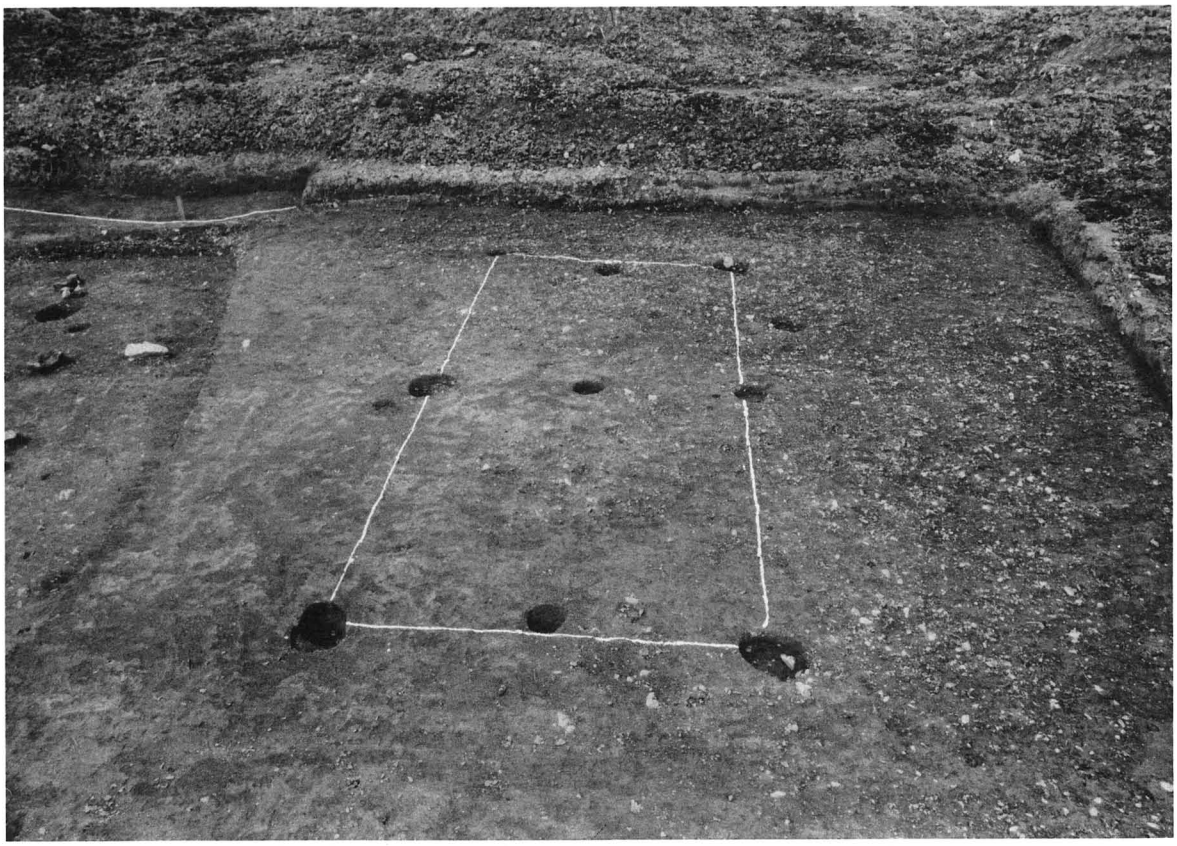
Ⅵ区Ｈ１

Ⅵ区Ｈ１西壁付近

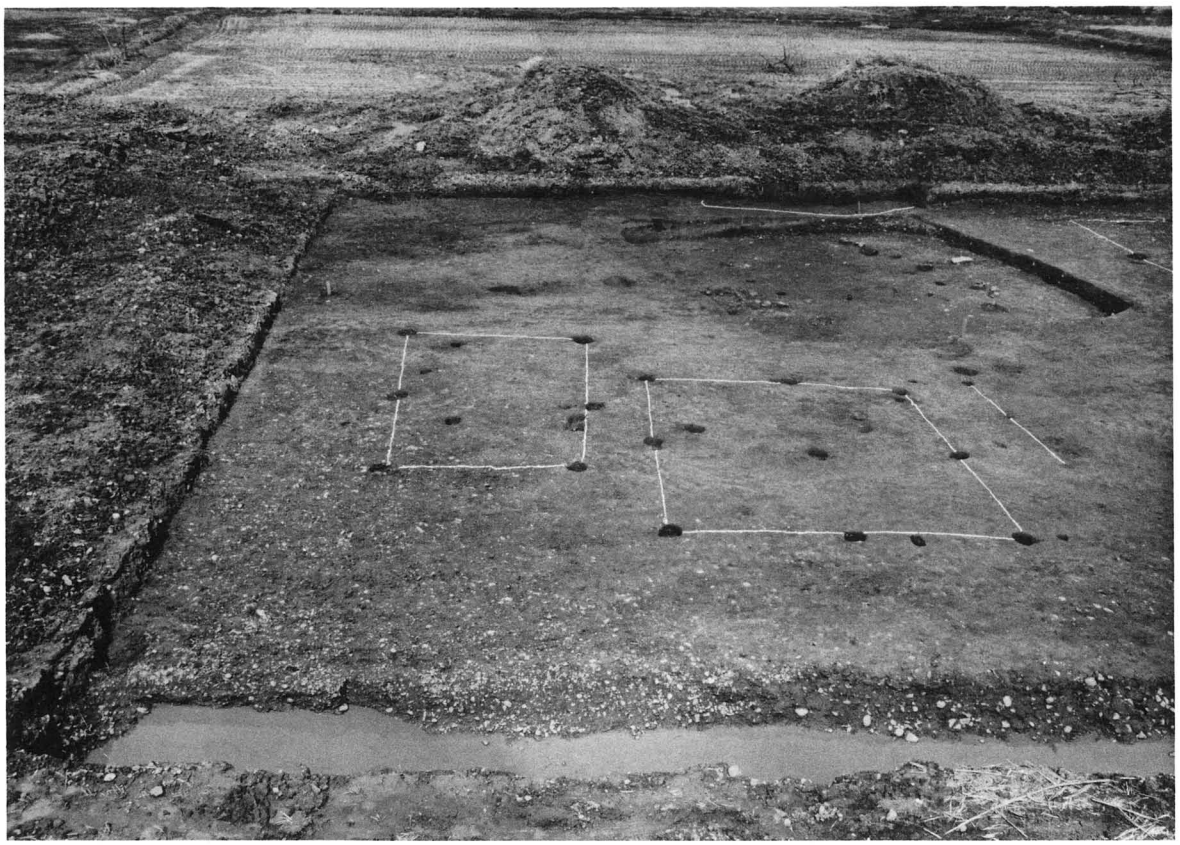


Ⅵ区Ｈ１北西隅付近

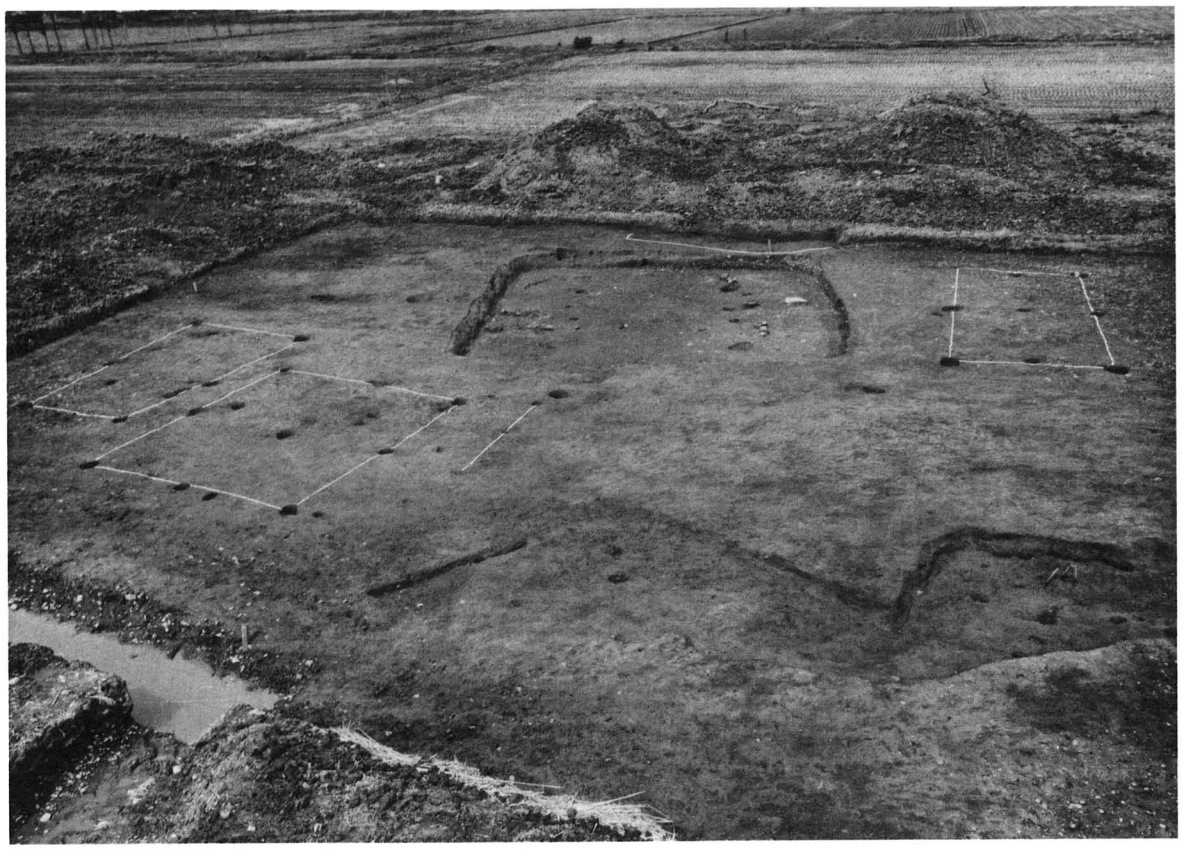
Ⅵ区Ｈ１（北から）



Ⅵ区B 1



Ⅵ区B 2・B 3

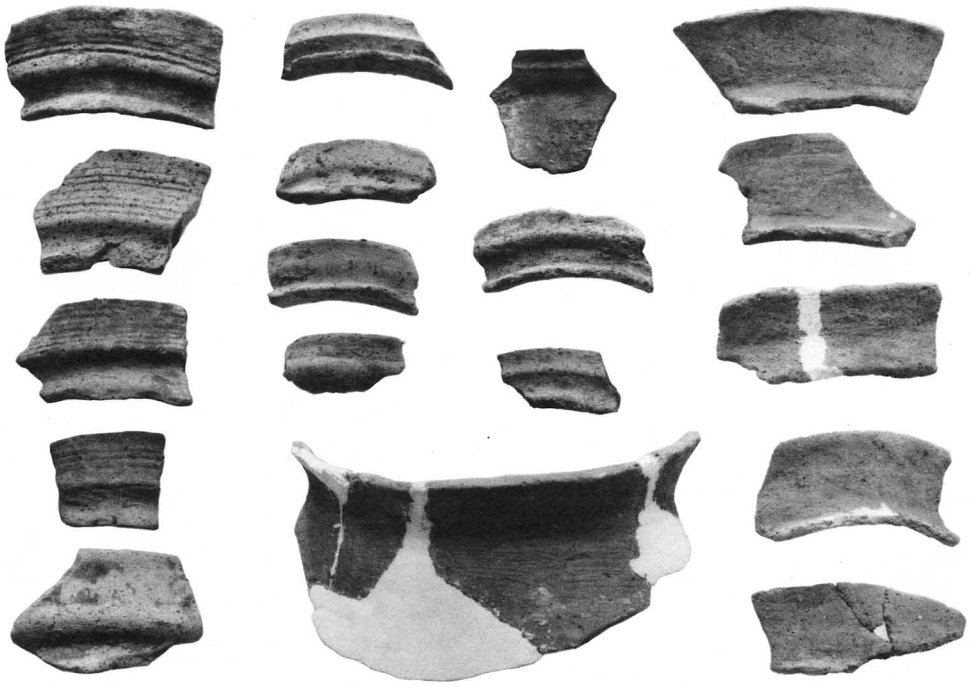


Ⅵ区全景

Ⅵ区Ｈ１遺物出土状況

Ⅰ区T 5(1)

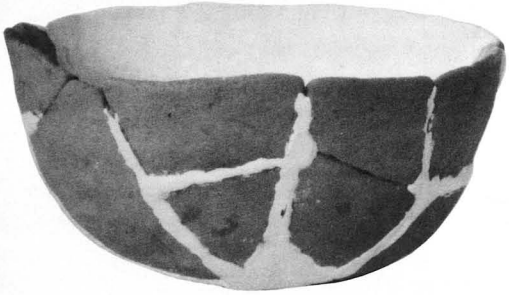
Ⅰ区T 5(2)



Ⅱ区T6・T7

Ⅱ区T6・T7

Ⅱ区T6・T7



Ⅱ区T6・T7

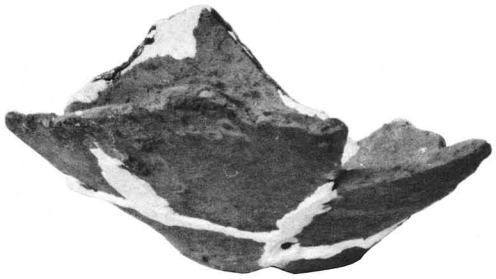
Ⅲ区T4・D1

Ⅵ区Ｈ１

Ⅵ区Ｈ１

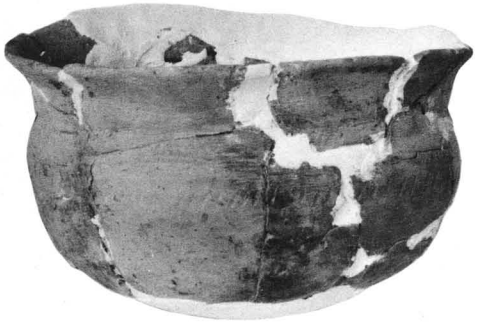
Ⅵ区Ｈ１

Ⅵ区Ｈ１

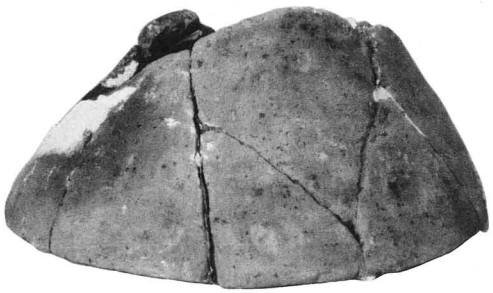


Ⅵ区Ｈ１

Ⅵ区Ｈ３



Ⅵ区Ｈ３



Ⅵ区Ｈ３

II　長浜市永久寺遺跡

1　はじめに

永久寺遺跡は、現在の永久寺集落の北東部を中心に弥生時代の遺物の散布することが知られており、また、集落内や集落に近接した畑地では須恵器や土師器をはじめ瓦等の散布することが確認されている。しかし、遺跡の性格はもとより、遺跡の範囲等についても詳細は明らかにされていない。従って、永久寺地先でほ場整備工事が計画された時、事前に発掘調査を実施し、遺跡の範囲や性格等を確認し、工事に対する遺跡への保存資料を得る必要性が生じたのである。

調査は、文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（990,000円）の再配当を受け、財団法人 滋賀県文化財保護協会（理事長　和田純一）へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調 査 主 体　　滋賀県教育委員会

調 査 機 関　　㈶滋賀県文化財保護協会

調 査 指 導　　滋賀県教育委員会　事務局　文化部　文化財保護課　技師　田中勝弘

調査補助員　　藤井益雄・北脇泰久・井塚哲男・岸本好弘・荻野勉・荻野良博・辻裕

なお、この調査にあたっては、長浜市教育委員会をはじめ地元永久寺町の方々に色々とお世話になった。ここに記して謝意を表します。

2　位置と環境（第１図）

永久寺遺跡は、長浜市永久寺町に所在する。現在の永久寺集落の北東部に遺物散布の中心地があって、このあたりは、標高およそ93ｍで、いわゆる湧水線上にある。永久寺集落の南側は、北東から南西方向に走る旧河道様の地形を呈し、この部分をはさんで北側には大辰已遺跡がある。大辰已遺跡からは、弥生時代前期からいわゆる古式土師器の段階までの各時期の土器類・木器類・銅鏃等が出土[(1)]している。前期は新段階のもので、量的には少なく、中期から後期の範囲のものが主流を占めている。中期前半では、甕類に近江系のものが多く、東海系のものが少ないながら含まれる。また、畿内的な櫛描横型流水文を持つ破片も若干出土している。中期中頃から後期にかけては、中期前半の系譜を引くとされる近江型の甕が多く、壺や高坏に若干の東海系のものを混じえている。大辰已遺跡の概略はこのようなものであるが、永久寺遺跡に関しては不明な点が多い。長浜平野における弥生時代遺跡は、鴨田遺跡・川崎遺跡等、永久寺遺跡と同様の立地条件にあるものが多い。発掘調査が実施されているものも少なからず存在するが、土器類の編年さえ確立していないのが実情である。今回の永久寺遺跡の発掘調査はほ場整備事業に伴う制限された中で実施したものであり、得た成果は微々たるものであったが、少なくとも、隣接する大辰已遺跡との比較検討が可能であり、今後、長浜平野の弥生時代社会を考えていく上で、わずかながらも資料を提示してくれるものと考える。

3　調査の経過（第２図）

調査は、ほ場整備工事による田面の切り下げがほとんどなく、工事による遺跡への影響が極めて小さいものと判断されたので、深掘が予想される排水路計画部分に２ｍ×10ｍの規模のものを基本とする試掘壙を設定し、遺構や遺物の包含層等の有無を確認することとした。この試掘壙で得た結果により、必要と認められる範囲で試掘壙を拡張するという方法を取った。試掘壙の設定は、休耕地に転作として麦作を行っている個所があり、基本通りに設定できない部分もあったが、基本的には、水田１区画に１ヵ所の割合いで試掘壙を設け、掘削順位にＴｒ１，Ｔｒ２……とナンバーを付した。結局30ヵ所に試掘壙を設けたのであるが、試掘壙の拡張については、Tr20においてのみ必要性が認められた。Tr20以外では、耕作土下は青灰色の粘土層あるいは砂層等であり、遺構や遺物の包含層等を検出できなかった。Tr20においても

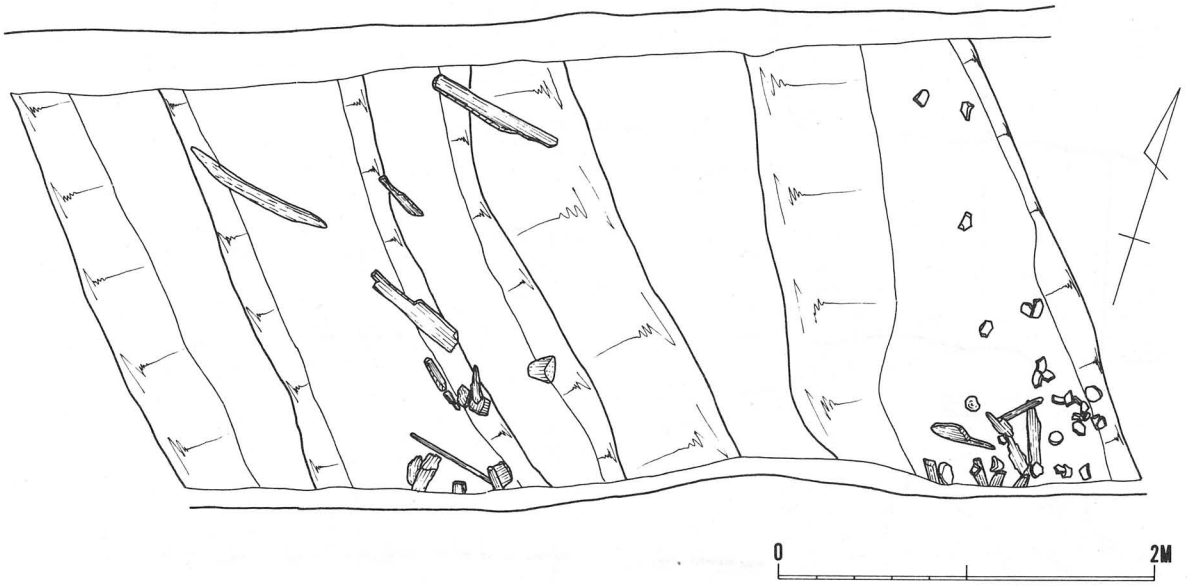
第１図　永久寺遺跡位置図（５万分の１）

第２図　永久寺遺跡附近地形図及びトレンチ配置図

検出したのは自然流路と考えられるものであり、従って、今回の調査では遺構を検出し得ず、遺跡の性格等についての資料は得られなかった。

4　調査の結果（第３図・第４図）

今回の調査では、今年度のほ場整備の対象範囲である東西400ｍ、南北400ｍの範囲において、約200ｍの間隔をおいて敷設される東西方向の排水路計画部分にトレンチを設定したのである。従って、現永久寺集落の南部の水田については、今回の調査結果から遺跡の広がりを確定することができる。すなわち、約160,000㎡の範囲において、遺物を出土した地点は、永久寺集落の南南東約150ｍの地点(Tr20)のみであって、他の部分では、遺構や遺物の包含層は存在しなかった。そ



第３図　Tr20溝状遺構実測図

こでは、表土下は青灰色粘土層あるいは砂層であって、これを切り込んだ状況で溝跡があり、その堆積土中に遺物を包含していたのである。しかし、遺構の広がりを想定してトレンチを排水路計画範囲内で拡張したが、西側は後世の掘削がなされ、新しい堆積土があり、東側では、遺構を検出することができなかった。これを以って、遺構の広がりを確定できないが、周辺の発掘調査については、ほ場整備工事によって破壊されないため今後に譲ることとした。ここでは、

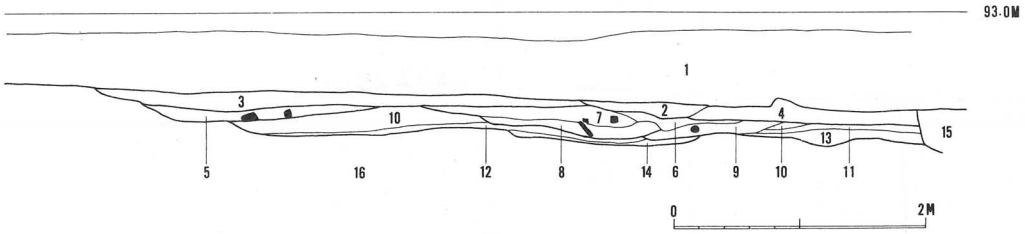
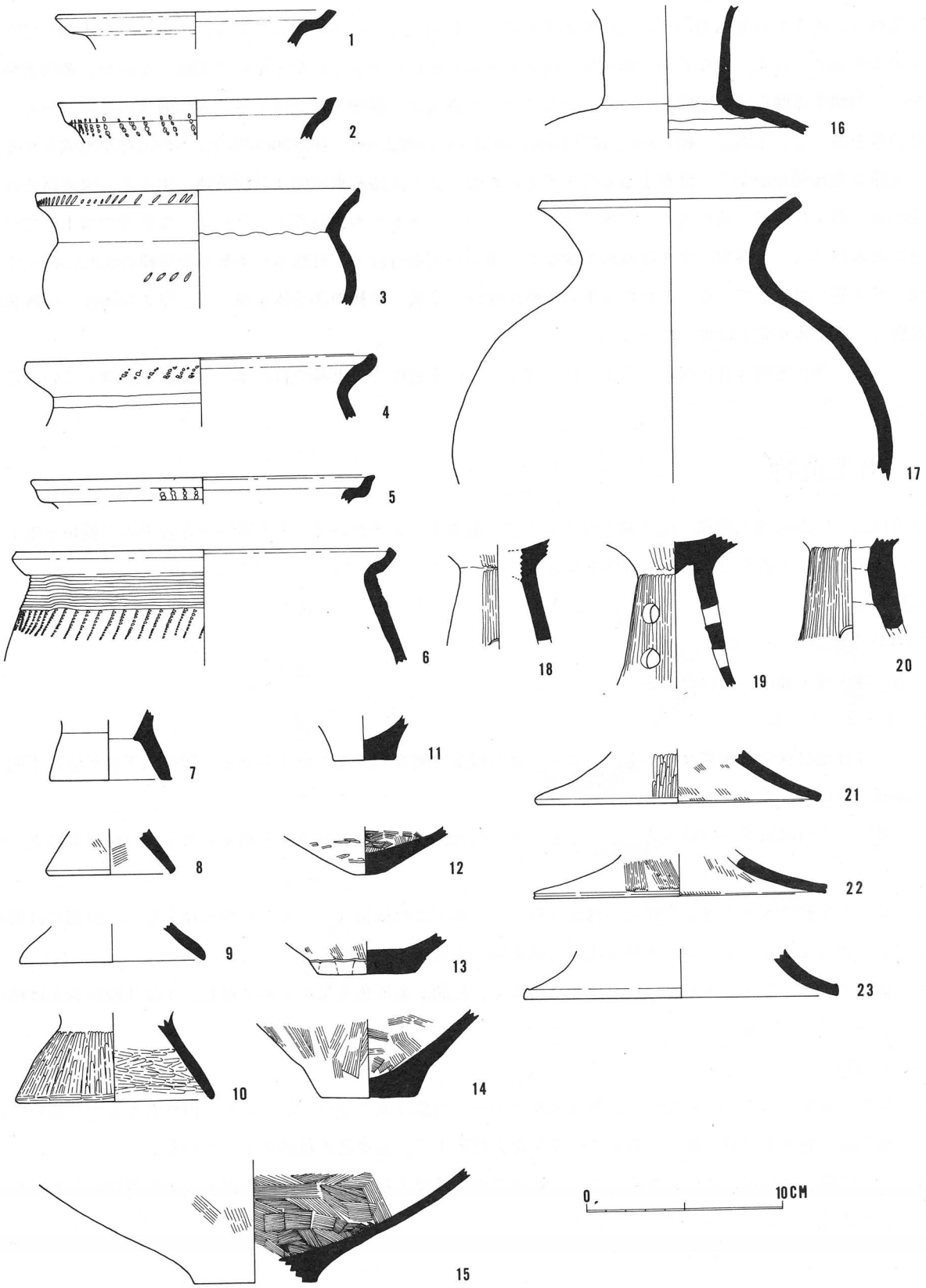


図４　トレンチ20溝状遺構断面土層実測図

1　耕土　　2　暗灰色粘土　　3　暗灰色粘質土　　4　砂粒層
5　灰色砂層（木、土器含包）　　6　スクモ層　　7　灰色砂層　　8　灰色砂層
9　灰色砂層　　10　灰色砂粒層（土器片若干包含）　　11　スクモ層　　12　スクモ層
13　砂粘層　　14　灰色砂粒層　　15　黄灰色粘土（攪乱壙）　　16　青灰色粘土（地山）



第５図　トレンチ20溝状遺構出土土器実測図

Tr20で検出した溝状遺構及びその出土遺物について報告をし、今後の調査のための資料を提供しておくこととする。

〔溝状遺構〕

溝状遺構は、南東から北西方向への流れを示すもので、幅約５ｍ、深さ40cm程である。溝内には、大別して３層にわたる堆積土が認められる。すなわち、頭初は、西側が後世の掘削が大きく広がっていて明瞭でないが、黄灰色粘土の地山を削り、西傾する傾斜面を形成している。そして、この溝底に、砂礫・スクモ・灰色砂粒層等の堆積がある。次に、この堆積層を削って、東側に、幅1.8ｍ、深さ10cm、西寄りには幅2.8ｍ、深さ30cm程の２本の流路が形成される。この２本の流路は先後関係がなく、併存するものと考えられた。この流路を東流路及び西流路とすると、東流路では、土器片が溝の東上端より内側へ流れ込んだ状態で出土し、また、自然木や木製品等がよどむような状態で出土している。これに対し西流路では、土器類の出土は極めて少なく、溝の中央部付近で、自然木や木製品が流路の流れに沿って一定方向に向った状態で出土している。これら２本の流路が埋没して後、頭初の溝全体を覆って、厚さ10cm程の暗灰色粘土や砂が堆積し、溝全体が完全に埋っている。

このように、溝状遺構は自然流路と考えられ、埋没していく過程で、土器や自然木・木製品を包含していったものと考えられる。

5　出土遺物

出土遺物は、Tr20の溝状遺構の出土品がほとんどで、他のトレンチからは、表土層等から若干の土器類を出土したに過ぎない。出土品は土器及び木製品・自然木である。

〔土器類〕

イ．Tr20出土土器（第５図）

甕・壺・鉢・甑・高坏・器台がある。

（甕―１・２・４～６）

１・２・５は受口状の口縁部を持つもの。２・５は口縁部に刺突列点文をめぐらせる。頸部以下の形態は不明であるが、口縁部は外傾し、端部に面を取る。

４は、外反する口縁端部を内側へ弯曲させたもので、口縁部外面に刺突列点文をめぐらせる。口縁端部は丸く細めている。

６は「く」の字形に大きく外反させた口縁部は短かく、体部は口縁部径より大きく胴部径を持つ。肩部には櫛状工具による11本の沈線及びその下に同じ工具を用いた刺突列点文をめぐらせている。

以上の甕類は、１・２・５・６が砂粒を含んだ胎土で、色調が赤灰色を呈するのに対し、４は比較的胎土は精良で、淡褐色の色調を呈している。

（壺―16・17）

16は直口で、端部は遺存していないが、外反気味である。肩部は丸くカーブしている。内外面ともナデていて、体部内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。若干の砂粒を含んだ胎土で、赤褐色の色調を呈している。

17は外反して開く口縁部に球形の体部がつく。口縁端部は外傾する面を取る。内外面ともナデ調整である。胎土に砂粒を含み、淡褐色を呈す。口径は12.9cmを計る。

（鉢―３）

外反気味に開く口縁端部を内側へ屈曲させ、外側に面を取って、この部分に刺突文を施す。体部は口径より大きくなく、胴部径最大個所にも刺突文をめぐらせる。

（甑―７）

脚台のつくもの。脚は裾部の径6.2cm、高さ2.4cmと低い。脚端部には面がある。

（高坏―18～19・21～23）

18～19は筒部、21～23は脚裾部の破片。21～23はともに外反し、端部に面を取る。調整痕の残る21・22では外面を篦磨きしている。内面は刷毛調整後ナデている。内面のナデは23にも認められる。18・19の筒部は裾部が21～23の形態を取るものであろう。ともに外面を篦磨きし、内面をナデて調整している。18は３方に円孔を穿ち、19は上下２個一対の円孔を３方に穿っている。19には坏部のさし込みに突起が残る。

（器台―20）

内外面の調整は高坏と同じ。円孔は４方に穿たれる。

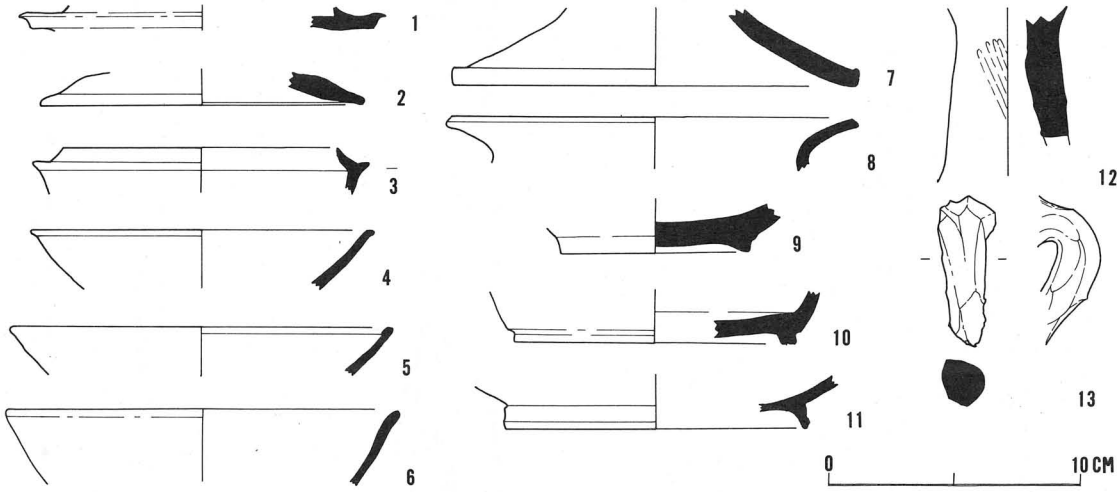
（その他―８～10・11～15）

８～10は甕の脚台であろうか。８・９は直線的に開く。内外面とも刷毛調整後ナデている。10は裾部径10.1cm、高さ４cmで、外面タテ、内面ヨコ方向の篦磨きが残る。

11～15は壺あるいは甕の底部で、11は底部径3.2cmと小さく、体部の広がりは大きい。外面は不定方向の篦磨き、内面は刷毛調整である。13・14は高台状の底部。13は外底面は平担であるが、14は上底状に中央が凹む。外面はともに刷毛目、内面は13がナデ、14が刷毛目を残す。15は底部径6.2cmで、体部は大きく外彎気味に開く。内外面とも刷毛目調整。

ロ．Tr13出土土器（第６図）

須恵器・灰釉陶器・土師器等があるが、いずれも表土層からの出土である。



第６図　その他トレンチ出土土器実測図
（１～６；トレンチ13、７，トレンチ16、８～13；トレンチ18）

（須恵器―１・２・３）

３の坏身は、受部の引き出しが小さく、口縁部も内傾して短い。２の蓋は平安時代に下るもので、扁平な天井部と端部を丸く納めた口縁部を持つ。１は不明品。

（灰釉陶器―４・６）

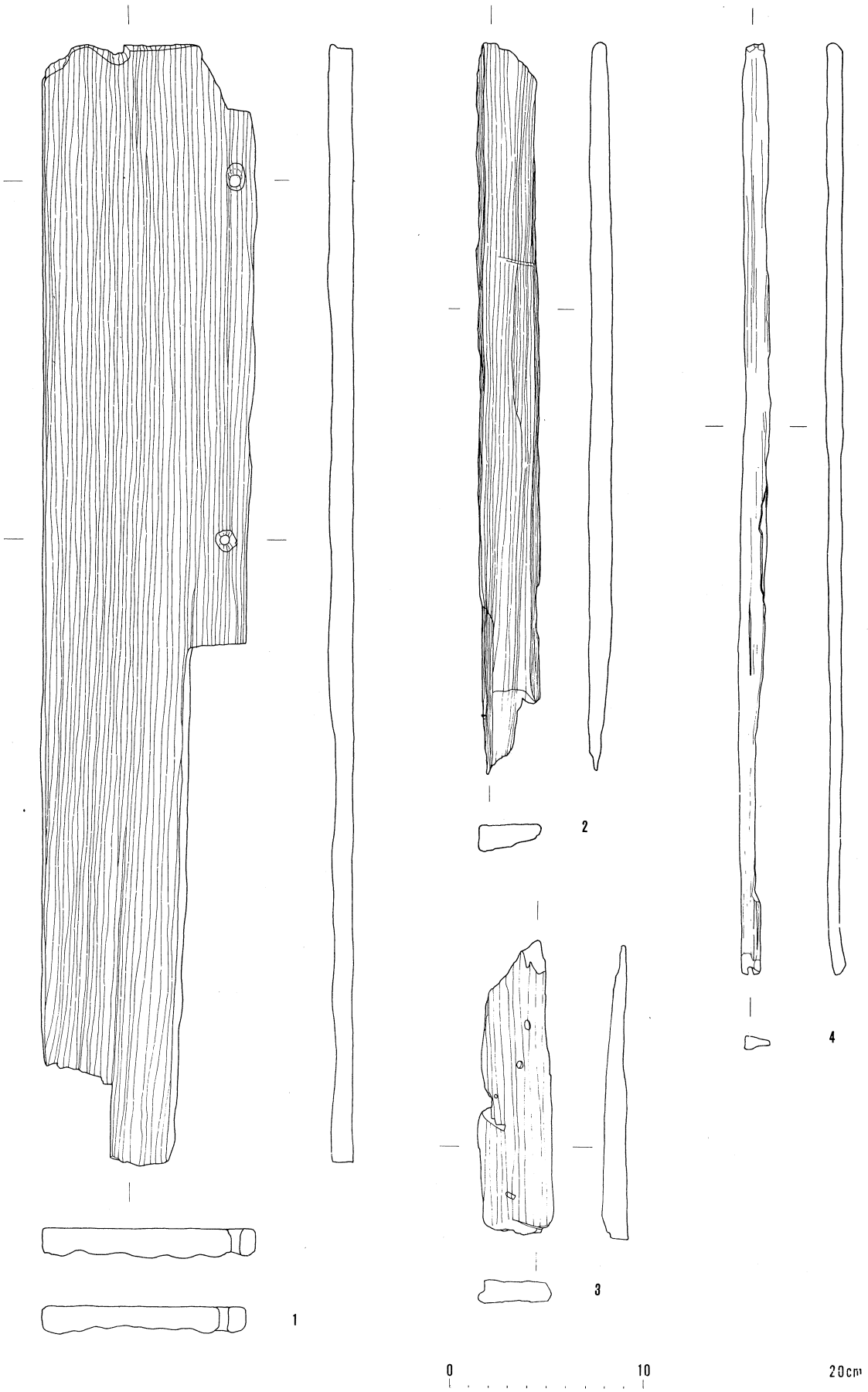
ともに椀の口縁部。口縁端部が４では外方へ小さくつまみ出して水平な面を取り、６では丸く納めている。

（土師器―５）

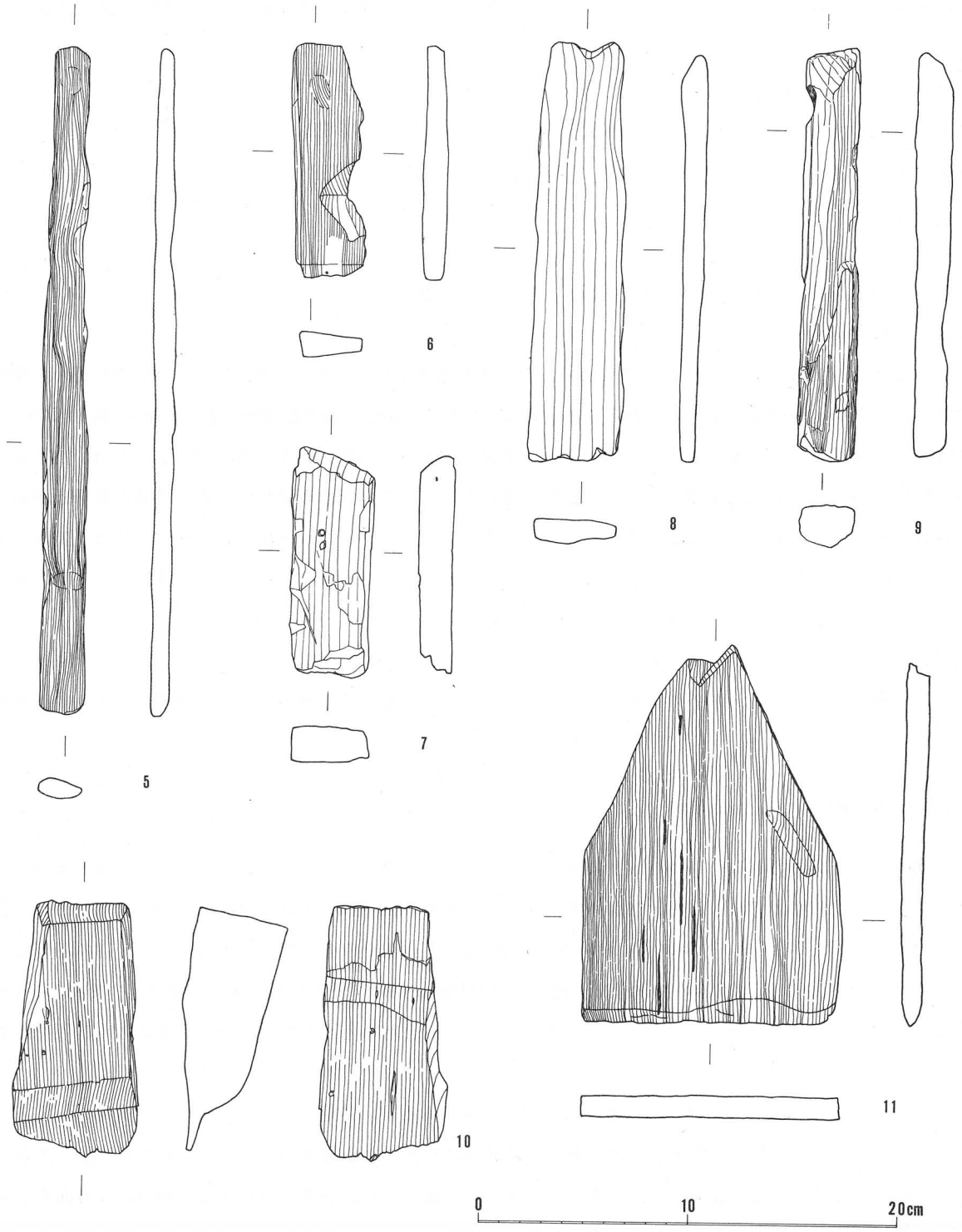
椀あるいは皿の類で、口縁端部を玉縁状に内側に肥厚させている。

ハ．Tr16出土土器（第６図）

（弥生式土器―７）



第７図　トレンチ20溝状遺構出土木製品実測図（１）



第８図　トレンチ20溝状遺構出土木製品実測図（２）

やはり表土層の出土で、高坏の脚裾部片。形態はTr20出土のものと同じである。

ニ．Tr18出土土器（第６図）

（須恵器―10・13）

10は椀。体部直下に高台が貼り付けられる。高台はやや外方に開き、端面がわずかに凹む。13は四耳壺の耳の部分の破片。

（山茶椀―９・11）

ともに椀。９は低い三角形高台。11は胎土精良で、灰白色を呈し、極めて堅緻である。

（土師器―８）

大きく外反する壺の口縁部片。

（弥生式土器―12）

器台の筒部。円孔を穿つが数は不明。外面篦磨き、内面ナデ調整。

〔木製品〕（第７図・第８図）

木製品はTr20の溝状遺構からの出土品だけである。自然流木も含まれているが、加工品のほとんどは板状・棒状品で、用途不明のものが多い。明瞭な加工痕の認められるものは10と11で、10は、長さ12.3cm、厚さ4.3cm、幅６cmのもので、一端をやや斜めに切り落し、他端を深さ1.8cmまでやはり斜めに切り、Ｌ字形の凹部が残っている。11は、長さ18.2cm、幅12.4cm、厚さ1.1cmの五角形の板状品。頂点に当る部分は欠失していて全景は不明だが、底辺に当る部分は斜めに削り落し、横断面が尖る。３・６・７・８は、残存長11cm～20.1cm、厚さ１cm～1.7cmの板状品の残欠、２は、長さ37.6cm、厚さ1.2cmとやや大規模に残る板状品、４・５・９等は棒状品である。１は、残存長57.9cm、厚さ1.2～0.9cmの板状品であるが、18.5cmの間隔で、径0.5～0.6cmの目釘状の穴があいている。

〔自然遺物〕

Tr20からは、桃核やドングリ・トチの実等木の実が出土している。その他立木があるが、加工品とともに樹種の鑑定は実施していない。

6　まとめ

以上が今回の出土土器類である。Tr20出土土器を除けばすべて表土層からの出土である。弥生式土器を除けば、古墳時代後期から平安時代末期までのものを含む。いずれも細片であるが、Tr13の坏身(3)は大阪府陶邑古窯跡におけるＴＫ217あるいはこれより新しくなろう。Tr18の椀(10)は平城宮跡ＳＤ650[(2)]よりさかのぼらないであろうし、Tr13の坏蓋(2)も同様である。Tr18の山茶椀(9)は灰釉陶器の終末を11世紀～12世紀初頭[(3)]におけばそれ以後のものであるし、Tr13の灰釉陶器もさほどさかのぼるものではなかろう。いずれにしても、これら表土層の出土土器は、永久寺遺跡の時期幅を示す可能性を指摘できる程度の資料である。

次に、Tr20出土土器は、自然流路内の堆積層からの出土遺物であるが、時期的なまざりの少ない遺物といえる。甕・壺・鉢・甑・高坏・器台があるが、甕・鉢では共通して口縁部に刺突による施文がなされているのを特徴とする。甕はいわゆる近江系の受口状口縁部をなすもので、また、口縁部の屈曲は比較的小さい。高坏及び器台は、外面を丁寧に篦磨きする点共通した特徴である。また、円筒に近い筒部から大きく開く裾部に移行し、端部に面を通る形態のものである。甕あるいは壺の底部のみを見ると、外底面中央を凹ませ。高台状にするものや尖底に近い底部もある。

受口状口縁部を持つ甕では、庄内並行期と考えた高月町円通寺遺跡第Ⅲ地区Ｍ１[(4)]では、口縁部への刺突による施文が極めて少なくなっている。また、高坏の坏部底部の凸起を持つものも見られない。鉢の施文についても体部に残る程度

である。従って、Tr20出土土器類は円通寺遺跡M・1のものより古式としてよかろう。

弥生時代後期の一括遺物を出土したものに、長浜市大東遺跡の方形周溝墓がある。後期前半と後半の2基からの出土土器である。受口状口縁部を持つ甕は後半の1号方形周溝墓から出土している。[(5)] ここでは、口縁部と肩部下半への刺突と肩部への沈線文で文様を構成している。この多様な施文はTr20の6の甕と共通している。

湖北町伊部遺跡も溝内の一括遺物である。大東遺跡の後期前半の2号方形周溝墓と並行すると思われるもので、鉢等はTr20に比べて古式である。[(6)]

このように、Tr20出土遺物は弥生時代後期後半の頃のものと考えられよう。受口口縁部を持つ甕では野洲町久野部遺跡七ノ坪地区のSD2上層のものと形態、施文等と共通性があり、やはり、後期の前半にはさかのぼらないとしてよかろう。[(7)]

7　おわりに

今回の調査は、ほ場整備工事の実施をきっかけに、現永久寺集落の南東部を中心に弥生時代集落跡の範囲、遺構や遺物の包含層の有無等を確認することが主な目的であった。結果的に、Tr20において遺物を包含する自然流路を一条検出したのにとどまった。調査が、ほ場整備工事により計画された排水路部分に限って対象としたものではあったが、弥生時代集落の広がりがさほど広範囲に広がるものでないことや弥生時代後期を中心とする遺跡であること等を知ることができた。今回の調査結果は、ささやかながらも、長浜平野における弥生時代遺跡の解明に寄与するものと考える。

（田中勝弘）

註

(1)　中村直勝編『彦根市史　上冊』（昭和35年）

(2)　田辺昭三他『陶芭古窯跡群　Ⅰ』（平安学園考古学クラブ、昭和41年）

(3)　（『平城宮跡発掘調査報告書』Ⅵ、昭和49年）

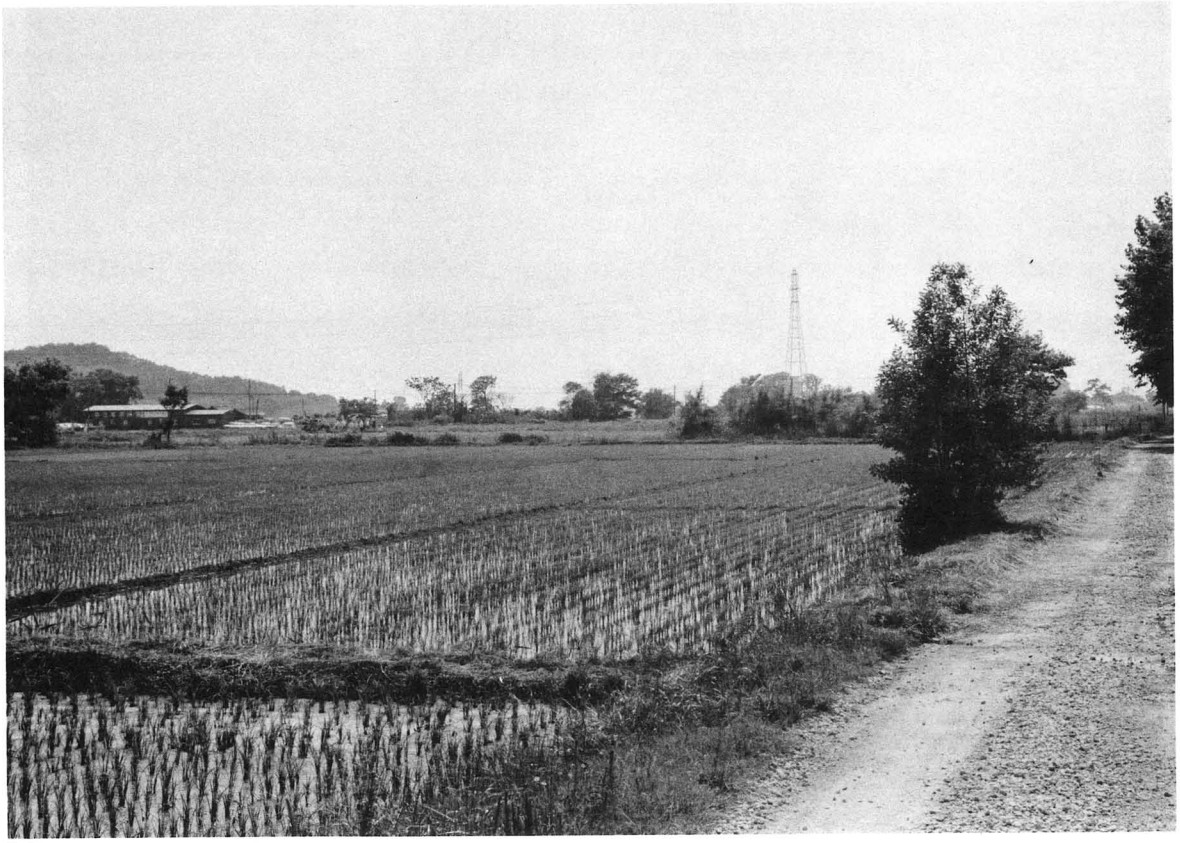
(4)　田中勝弘「高月町円通寺遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ―Ⅱ、昭和51年）

(5)　中谷雅治他「大東遺跡の発掘調査」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ、昭和44年）

(6)　昭和54年度発掘調査

(7)　大橋信彌他『久野部遺跡発掘調査報告書―七ノ坪地区―』（昭和52年）

図　　版



遺跡遠景（東より）

遺跡遠景（北より）

トレンチ20全景（東より）

トレンチ20溝状遺構全景（北より）

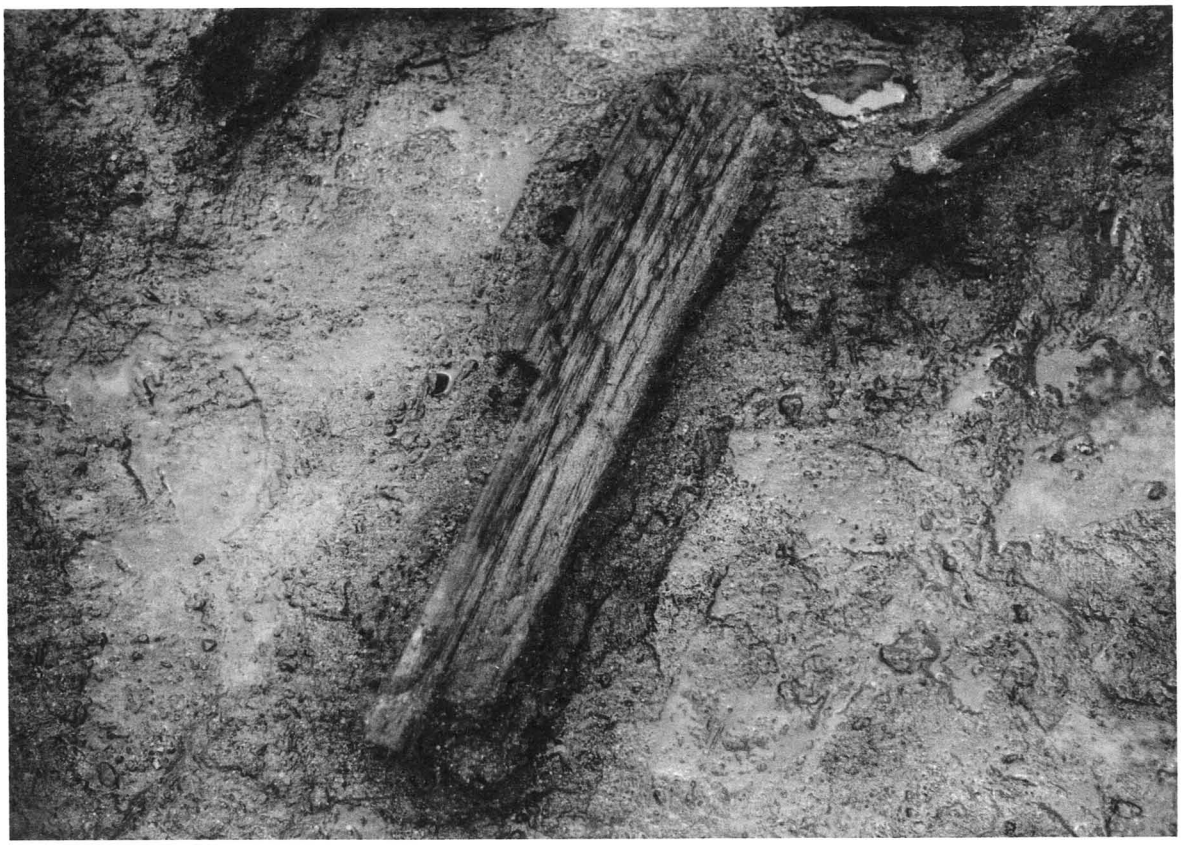
トレンチ20溝状遺構東岸部分遺物出土状況（北より）

同上　近　景（東より）

トレンチ20溝状遺構東岸部分土器出土状況（東より）

同上　木製品等出土状況（北より）

トレンチ20溝状遺構中央部遺物出土状況（北西より）



同上　木製品出土状況（北西より）

17

16

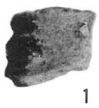
7

10

19

18

20

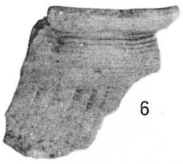

1

2

3

4

5


6

11

12

13

14

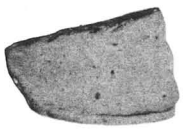
15

8

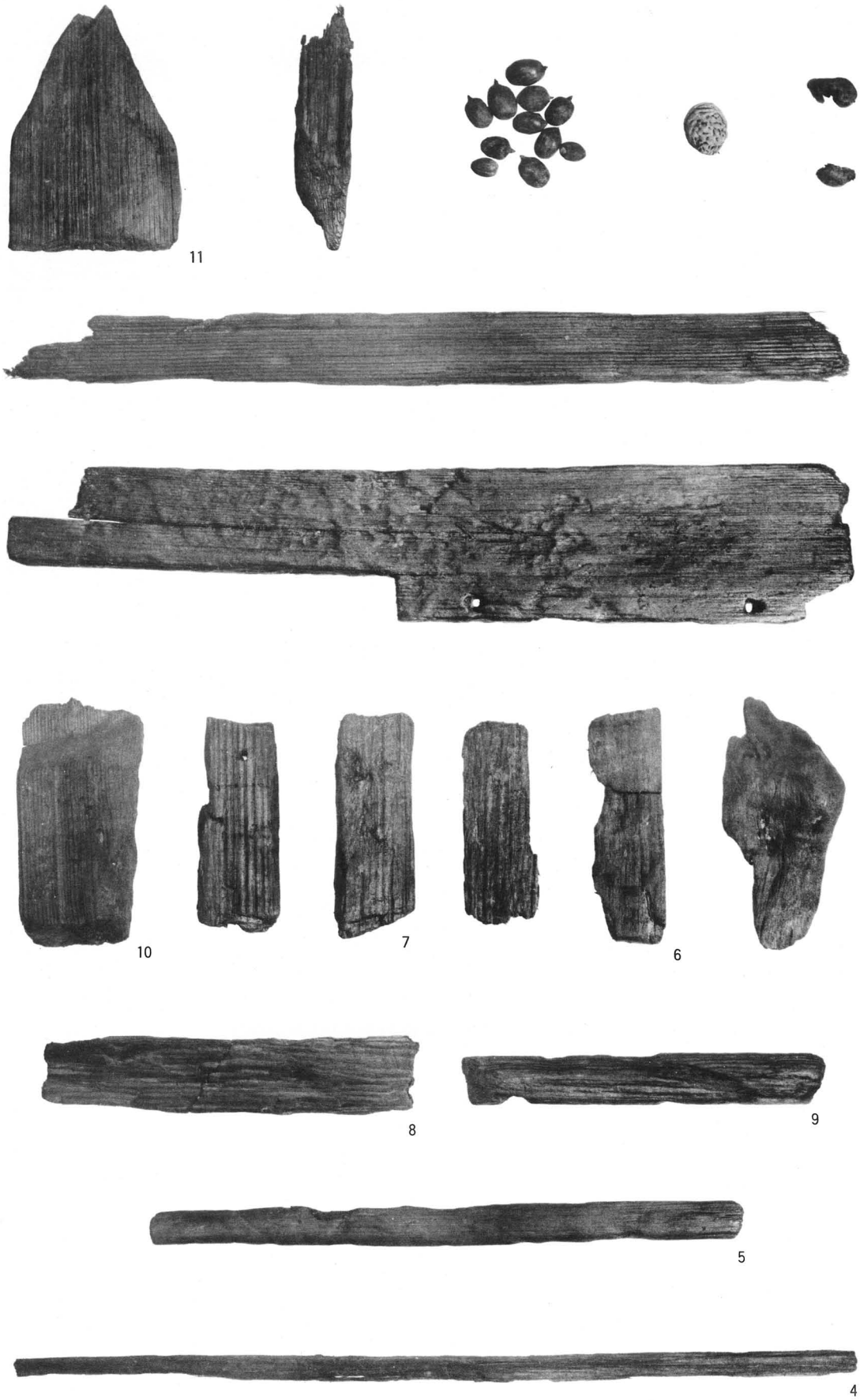
9

21

22


23

トレンチ20溝状遺構出土土器（№は図４の№と一致）



トレンチ20出土木製品、木ノ実（No.は図6・7のNo.と一致）

昭和56年３月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅸ－１

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会

財団法人　滋賀県文化財保護協会

印　刷　有限会社　真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

ＴＥＬ（０７５）３５１－６０３４